

---

# 幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

++

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち?

### 【Zコード】

Z4206Z

### 【作者名】

十十

### 【あらすじ】

大切なモノを守るためになんだって犠牲にする それが俺の生き方だ。殺し屋である少年の日常と非常。大切なモノを守るためにとは言え、人を殺してしまってもいいのだろうか? ダメなんじやないか? 日々そんな感じで葛藤し苦悩する少年の行く末は。

## プロローグ（前書き）

駄文ですが、どうか最後までお付き合っていただければと思います。

## プロローグ

闇夜に浮かぶ幾多の摩天楼。

いま俺が視界に捉えているその光景は、夜空に瞬く星そのもののようだ。

逆に、夜空自体には星が一つたりとも存在していない。……温曖化とかフロンガスとかが関係してるのがもな。

結構どうでもいいことを考えながら、俺は腕時計を確認する。

午後一一時二六分。

予定時刻まであと少しうと迫り、俺の胸はだんだんと高鳴つてきた。時計のカチカチと動く針を見ていたらさらに緊張してきただめ、俺は時計から摩天楼に目を戻す。

うん、やっぱいい眺めだ。俺がいるのは地上一〇〇メートルに位置する屋上で、ここから見える景色は俗に言つあれだよ、あれ……そう！一〇〇万ドルの夜景つて奴だ。見るからに金かかつてそうだもんな。……つてあれ？一〇〇万ドルの夜景の意味つて、金のかかつた夜景つてことでいいのか？……ま、どうでもいいや。

にしても寒つ！Tシャツと短パンなんかでこんな場所に来るもんじやないな。まだ九月の上旬だからつて甘く見てたぜ……。うう

……寒つ。

地上ゼロメートル地点とはまったく異なる突風吹きすさぶ中、俺はその場で駆け足をしながらもう一度時計に目を向けた。

午後一一時二九分。

「そろそろだな……」

俺がこんな寒空の下にいる理由は、一分後にやらなければならぬことがあるからだ。

そのことを考えると、また緊張が湧き上がつてくる。寒さと相まって、俺の体は小刻みに震えだした。あ……これはちょっとヤバイ。手元がブレるかも。

しかしそうも言つてられない。これは絶対にしくじれない仕事なんだ。もしも、もしもしくじれば、俺自身が危うくなるかもしい仕事なんだよ……。くそつ、また震えがきつくなつたぜ……。

「……落ち着け、落ち着くんだ、俺」

咳きながら、俺は仕事道具を掴む。三脚によつて固定されている狙撃銃を。

「大丈夫、大丈夫だ……」

自分に言い聞かせるように言葉を発し続けながら、俺はすでに倍率も標準も合わせてあるスコープを覗く。

スコープが映しているのは、とあるビルの会議室のお偉いさんが座る席だ。

さみい……くそつ、早く来いよ。これ以上体温が下がると精度が落ち 来た……っ！

心で愚痴をこぼしていると、裕福そうな強面老人がスコープの中央に現れた と同時に毎度のことながら、俺の中に残る僅かな良心が津波のように押し寄せてくる。

こんなことしていいのか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことするの間違つてると思わないのか？

こんなことこんなことこんなこと……こんなこと……こんな

……いや違う！……これは何不自由なく暮らすためなんだ！ 生きる

ためなんだ！……でもそんな自分勝手のために……俺は人をこう

……違う！……違うんだ！……これは自分勝手じゃない！ こうしてく

れつて頼む人がいるから、俺はそうして欲しい人のためにやつてるんだ！ 自分勝手じゃなくて誰かのためだ！

でも、それが自分勝手につながるんじゃないのか？

違う！……うるさい！ もう何回もやつてることだろ！ いい加減

にしないと……こんな感情はもう失くさないと……。非情になれ。

非情になるんだ！

俺は引き金を引いた。

刹那  
乾いた破裂音が虚空にこだました。

「おれの心」

スコアを覗いていた目が狙撃の結果をハッカリと捉え  
結果、

「うう、うえ、まあ まあ、あ、ア  
昇ぐ、逃げなーと

ひとりしきり呟き終えた俺は、すぐさま銃の収納に取りかかる。は、

ついでに今まで考へてこた」となんてまるで忘れた。一刻も早く

行動たかひ

罪悪感に浸る暇がない

金を収納し終えた俺は、勢いよく非常階段を駆け下りた。カンツカンツカンツと、俺の逃走ルートを向こうに誇示しているかのような金属音を、立てたくないのだが立ててしまう。実際はそんなに大きな音ではないんだろうが、俺には街中に響きまくっているんじゃないかと思うほどに大きく聞こえる。そして、それがまた俺の恐怖心をあおり、いつそう焦らせる。

俺は下りるスピードを上げた

俺は下りるスピードを上げた。当然、音はよりいつそう早く大きくな聞こえるようになる。プロのドラマーのようなリズム。普段聞いたば小気味よく聞こえるのかもしれないが、いまはこの音を聞いた者が報復にやつてくるのではないかと思つてしまつ。

俺は水浴び後の犬のようには身震いをした  
もちろん、言つまでもなく恐怖からだ。

「ハア、は、ハア、はあ、ハあ」

俺はとにかく走つて走つて駆け下りる。

そうして、途中何度かコケそうになりながらも無事に地上まで走りぬいた俺は、何事もなかつたかのように街へ溶け込む。ここには大都会。地上まで下りてしまえばこちらのものだ。もう次の日にならうかという時間帯だが、人はまったく減らない。むしろ増えているような気がしないでもない。ブロンド超絶美人にマッチヨな黒人、俺と同じ年ぐらいの少女が男と歩いていたりと、紛れ込むにはもつてこいだ。

ちなみに、銃はギターケースの中に入っているからバレはしない。俺はいま、どこからどう見てもバンドの練習帰りのガキだ。リズムでも刻むかのように頭を振りながら歩く。

しばらく進み非常階段から結構離れたところで、俺はギターケースの肩紐を気にかけるフリをしながらちよつとだけ振り返つてみて立不動で屋上の方を見上げている奴もいる。

ふう……危なかつたあ、今回はマジでギリギリセーフだつたぜ。あと何十秒と遅かつたら俺はいま、蜂の巣で作ったオブジェみたいになつてただろうからな。

「はあ……」

顔をしかめにしかめた。

なんでかつて言つと、さつきまで潜伏してたビルの下にどう見ても一般の方ではない黒服の男たちが数人いらつしゃつて、獲物を探すハンターみたいに辺りをキヨロキヨロと見回していたからだ。直

6

俺は肺にためていた空気を全て押し出すように息をはいた。これはため息じゃない。心からの安堵を表現したんだ。  
危険な仕事もこれでとりあえずは無事に終了つてわけだからな。  
さてと、あとは帰るだけだ……。  
愛しいあいつが待つてゐる家にな。

腕時計で時間を確かめると、すでに一時を過ぎていた。

俺は閑静な住宅街の中を歩いていた。まあ、一時を過ぎればどこも大抵は閑静なんだろうけどな。

と、そんなバカな事を考えていると我が家が見えてきた。いや、正確には家つていうか道路に出てる看板が見えてるだけだ。

『ストルス雑務店』つていう看板。

俺の家は自宅を店舗に自営業をやってるんだ。

雑務店つていうのは、要するに何でも屋。

本当は父さんと母さんが営んでたんだけど、その父さんと母さんは一年前に事故で死んでしまった。以来、俺が継いで営業している。あ、そうそう。言つておくけど、殺し屋つていう仕事は俺が勝手にやり始めたことで、父さんと母さんは人殺しなんかじゃないからな。

父さんと母さんは、ただ近所の人たちの助けになりたいっていう意志の下に何でも屋を始めただけなんだ。だから、父さんと母さんに変な思いを抱かないで欲しい。

蔑むなら俺だけを蔑んでくれ。父さんと母さんの店を汚してしまつたのは、紛れもなく俺だから。

だから、父さんと母さんに対して、心の底から申し訳なく思つてる。悪いことして「ごめんなさい、人の道を踏み外して」「ごめんなさい、店を汚してしまって」「ごめんなさい」とつて。

悔いても悔いても悔やみきれないほどに申し訳なく思つてる。

だつたら殺し屋なんかやるんぢやねえよつて思うかも知れないけど……でも、そうしなければならなかつた。……でないと生きられなかつた。

父さんと母さんが生きている時、つまり、何でも屋を大人一人で切り盛りしている時ですら、家計がそれなりに厳しかつたんだ。

なのに、父さんと母さん、大人一人が死んで、俺一人でやり始めたらどうなったと思う？

生活できなかつたよ。

俺だけじゃできることも限られるし、そもそも当時中等部だった俺に依頼しようとする奴なんて一人もいなかつた。

かなり苦しい日々が続いた。……それが俺一人ならよかつたさ。でも、俺には妹のリールがいるんだ。だから、そのリールのためになんとかしないとつて俺は考えて、それであちこちから色々な情報をかき集めた。なんでもいいから金になるようなことを必死に探し始めたんだ。

そしたらあつた。この時代にも殺し屋つていう仕事が。

最初はやろうかやらないかでもの凄く葛藤したことを覚えている。けど、いま現在の俺を見てもらえば分かる通り、俺はその殺し屋つていう仕事をやることにしたわけだ。

今まで鮮明に思い出せる。

最初のターゲットをナイフで突き刺した時のこと。罪悪感で満ちたことを。でも、口座に結構な額が振り込まれているのを見て思わず笑つたことを。

ハハツ、俺はもう堕ちてるんだ。

ダメ人間なんてもんじやない。もう壊れに壊れて破綻しまくつてる。

こんな奴、ホントならリールのそばに居ていい人間じやない。でも、俺がいないとあいつはどうなる？

きっと、いや絶対に一人では暮らせない。だつてさ、リールはまだ小六なんだぞ？ 生活力なんていまはない。

だから俺は、自分が破綻していると分かりながらもあいつのそばにいる。あいつに何不自由ない生活をさせてやるために、俺はそばにいる。これからもそばに居続ける。

それにさ、リールは俺の原動力なんだ。リールがいるから、俺はなんだつてできるんだ。逆にリールがいないなら、俺は何もしない

かもしだい。

と、色々考えながら歩いていると、家の玄関前まで到着した。  
さあて、その原動力にもうすぐ会える。俺はほころぶ顔を抑えられない。

玄関の鍵を開けた俺は、もの凄い小声で「ただいま」と言いながら家に踏み込んだ。もちろん返事はない。といつよりあつたら困る。なるべく音を立てないようにしながら、俺は一階の自分の部屋へと向かう。

真っ暗な自室にたどり着いた俺は、ギターケースを隠し収納スペースにしまうべく棚をスライドさせる。……スライドって言つたけど、ホントは押してずらしただけだ。一冊の本をスイッチ代わりにしてウイーンって開くとかじやないからな。

まあそれはさておき、俺は眼前にお田見えしている隠し収納スペースにギターケースを立てかける。ギターケースを収納できるぐらいには大きな空間だ。おおよそロッカー二つ分ぐらいだ。

ここには他にも殺しの道具が隠してあつたりする。例えばスタンダードにサバイバルナイフとか、電圧を異常なまでに高めたスタンガンとか、あんまり使わないけど普通のハンドガンもある。武器だけじゃなくて睡眠薬なんかの薬物も揃えている。

俺も一応は殺し屋だからな。それなりに道具集めはしてるつてわけさ。けど、今後は特に増やす予定もない。大体は狙撃銃でカタがつくからな。

「んぐつ……」

ズズズツと、用が済んだので棚を元の位置に押し戻す。

隠し場所がそんなところで大丈夫なのかと思うかもしれないけど、心配には及ばない。この家には俺とリールしか住んでないし、そもそもリールにはこの棚をずらす力はないだろうし つてそつだ、その華奢な体を押しにいかないと。

俺は抜き足でリールの部屋へ向かう。

あんな汚い仕事をしたんだ。可愛い妹の顔を見て色々相殺しない

とやつてられないって話だ。

リールを起こさないようにと、俺は慎重にドアを開けて忍び足でベッドに近づき 目を見開く。

「……ああ、可愛い」

数時間ぶりに見たリールはとても、それはもう凄まじいほどに愛らしい。

金色の艶やかな長い髪。いまは閉じてるから分かんないけど、開くとめちゃくちゃくりつとしてて猫みたいに大きな愛おしい目。小柄な身体は白を基調としたパジャマに包み込まれている。

外見だけ見ると、天使みたいでどこか大人しそうに見えるんだけど、それはまったく違うんだなあ。実際は凄く天真爛漫で、この姿とのギャップが最高だ。タオルケットを蹴飛ばしてるのがまた可愛いらしいじゃないか。

俺はそのタオルケットを腹にかけてやり、「おやすみ」と呴いてからリールの部屋を出た。あんまり長居して起こしても悪いからな。それに長居なんてする必要ないんだ。俺はリールの顔をチラッと見るだけで、それだけで何もかも忘れられるんだ。嫌なことでもなんでもな。それに、俺はそれだけで活力がもらえる。さつきも言ったけど、リールは俺の原動力。いや、原動力なんて表現じゃ收まりきらない。もう端的に言つてあれだ。

リールは俺の全てだ。

これは大げさでもなんでもなく、どうしようもないほどに本当のことだ。少し気持ち悪いかもしねないけど、俺としてはどこまでも大真面目な表現だ。

だつて、俺はあいつのためならなんでもする。なんだつてできる。それを証拠に、俺は人を殺してるだろ？ リールに不自由な思いをさせたくないから、頑張って人を殺してるだろ？ もちろん……これからも殺し続けるつもりだ。

俺は……俺はリールのためになるのなら、墮ちるとこ今まで墮ちてやる。俺一人おかしくなるだけでリールが救えるのなら、俺はどこまでだって墮ちてやる。

「……あっ！」

そこまで思考したところで、俺はいまリールの部屋の前にいると  
いつことを思い出す。

くそっ！ バカか！ 何やつてんだ俺は！ リールの部屋の前で  
汚いことを考えるなつて言つてんどうが！ リールを穢すな！  
自分に喝を入れながら、俺は急いでリールの部屋を離れる。  
ふう……これで良し、と。

さて、俺は殺し屋である前に、ただの高校生でもある。当然ながら明日も学校だ。あーイヤだイヤだ。殺人休暇つて制度を導入してくれないもんかねえ。……冗談だから気にしないでくれ。

それはそうと、早いとこシャワー浴びて寝るとするか……。

そのあと俺は、いま言つた通りにシャワーを浴びてからベッドに  
もぐり、あつとこう間に夢の中へと落ちていった。

人を殺す、ところ行為をした日は、いつも大体こうして終わる。

「「」お……っ！」

次の日の朝、俺は腹部にもの凄い衝撃を感じて眠りから覚める。だが、これがなんのか分かっているので、俺は焦りもせず目を開けるよりも先に声を発した。

「おはよう……リール……」

「おはよう…… フィー兄ちゃん！」

リールの弾むような無邪気な声。俺は毎朝毎朝いつもして起しあれる。「うらやましいだろ！ ちなみに、リールは俺のことをフィーと呼んでいるが、俺の名前はフィーーーットだ。

「早く起きなきゃダメだよ。早く早くう～」

言いながら、リールは俺の腕を引っ張る。

……ああ、幸せだ。リールの力強い引っ張りのせいで俺はベッドから床に落ちたけど、そんなことは怒る材料になんてならない。むしろ微笑ましい限りで、俺の顔は自然とほころぶ。

と、なぜか分からないけど、リールが初等部の制服のスカートを急に押さえ始めた。

どうしたんだろう？ と思つてみると、リールが顔を赤くしながら言葉を発してくれる。

「ふい……フィー兄ちゃん……わ、私のスカートの中見て笑つた……」

ああ、なるほど。俺の微笑みをパンツを見て笑つたと捉えたのか。つたく、俺はそんなに変態じやないぞ。

「いいカリー！」

「い、言い訳なんか聞かないもん！ えつちえつち変態！ フィー

兄ちゃんのバカアホ間抜けッ！」

可愛らしく、ふくうと頬を膨らませながら、リールが悪口の限りを

吐き出してきた。

「くつ……反抗期か！ だがしかし、俺にそんな罵倒は効かない。怒つたリールすらも愛しく感じるんだからな。

俺はますます顔をほころばせた。

「わ、私のスカートの中を思い出して笑つてるんだね！ ふい、フイー兄ちゃんなんかもう知らないもん！」

俺の笑顔は変態っぽいのだろうか。リールはそうはき捨てて、俺の部屋から出て行つた。その後ろ姿も可愛いらしい。

「……見てないんだけどな」

リールの背を見送りながら、俺は苦笑いを浮かべて立ち上がる。そもそもリールのパンツなんて、俺は洗濯物として干してあるのを散々見てるんだけどな。……やっぱり穿いている物を見られるのは恥ずかしいのだろうか？ ……そういえば、水着は見せるものだから恥ずかしくないが、下着はあくまで下着だから恥ずかしいとかなんとか誰かが言つてたような……。

俺があごに手を当てながら考えていると、開けっ放しの部屋の入り口からいい匂いが漂ってきた。

どうやら、すでにスリイナが来ているようだ。 あ、スリイナつていうのは、スリイナ・フォシルニクスつて言う俺の幼なじみのことだ。いいとこのお嬢さんで、俺の家のすぐ近くにある大きなお屋敷に住んでるんだ。

スリイナのお屋敷には、俺がまだ人殺しに手を出す前、父さんと母さんが死んだ直後に少しのあいだだけ世話になつたことがある。そうなつた経緯としては、俺とスリイナが幼なじみだからといつても当然あつたんだけど、もつと大きな理由として、俺の父さんとスリイナの親父さんが昔からの知り合いだつたつていう要因もあつたんだ。その頃は俺もリールも暗く沈んでた時でさ、正直な話、あの時スリイナのお屋敷に呼ばれなかつたら、俺たち兄妹はあと追い自殺でもしてたかもしれない。だって、父さんと母さんがいきなりこの世からいなくなつたんだぞ？ そうなるのも無理はないって思

わぬいか？

……ま、そんな辛氣臭い」と呟く。

とにかくだ、スリイナはいいとこのお嬢さんで、俺の幼なじみでお嬢さんのくせに料理ができる、なんとも不思議なほんわか少女だ。で、そんなほんわか少女は今日も朝食を作りに来たらしい。別に頼んでるわけじゃないんだけど、やっぱ父さんと母さんがいないうとを気遣つてくれるらしいんだよ。まあ、俺としては作ってくれてもくれなくても、どっちでもいいんだけどな。……いや、あれだぞ？ 作ってくれることに関してはありがたくは思つてゐるぞ？ 当たり前だけど。

それで話はちょっとじばかし変わるんだけど……スリイナも当然、俺が人殺しだということは知らない。

つまり、俺は自分が殺し屋だつてことを誰にも言つてないつてわけね。だからつて、理解者がいないから辛いとかつてわけではないけどな。どつちかつて言えば誰にもバレたくないし。 つてそりや当然か。

なんてことを考えたのち、俺は部屋を出た。  
これはなんの匂いかな？ 階段を下りながら、俺は鼻をくくんくんさせる。……分からん。

朝食の材料はスリイナが自宅から持つてくるんだ。だから、家の冷蔵庫の中身を把握していくもどんな朝食が出てくるかは分からない。でもま、それがまた面白いんだけどな。

だつて驚くなれ、こないだは朝からキャジアさんが出てきたんだぞ。どこの高級ホテルだ！ つて思わず突つ込んだものだ。  
でさ、俺がそう突つ込んだら、スリイナの奴なんて言つたと思つ？  
『こんなの高級じやないよ？』

だとさー！

生まれも育ちも違うつていつのはまさにこれだ！ と痛感した出来事だつたぜ……つ！

ちょっと苛立ちながらリビングの手前までやつてきた俺は、さて

さて今日はどんな食材を持つてきやがったのかなあつと思ひながらリビングを覗いて

「…………は？」

俺はリビングに入ることをやめ、廊下で深呼吸を開始する。

あいつ……またやつてくれたよ……。とんでもないもん持つてきやがつたよ。写真とかでしか見たことのないもん持つてきやがつたよお！

いやいやちよい待て……あんなもん一体どこで作ったんだ？

スリイナはいつも我が家の狭苦しいキッチンで朝食を作るのだが、あれを作れるほどの機能、うちのキッチンにはなかつたと思う。ということはだ、スリイナの奴……あれを自宅から持つてきたつてことか？ フォシルニクス邸から一〇〇メートル近く離れた俺の家まで、スリイナはあれを持って歩いてきたことなのか。バカかあいつは！

それに俺つてば、朝はシンプルにいきたいんだよね。パンでいいんだよ、パンで。なのに、なのに……何あれ？ なんで朝つぱらから油で揚げたもんを食わなきゃいけないんだ。

イライラが増してきた。俺は文句を言つため、リビングに踏み込む。

「おい、スリイナ！」

「あ。フイー、おはよう

穏やかな目を緩めに緩めて、スリイナが挨拶してきた。……だがな、俺は挨拶どころじゃないんだぜえ！

「おはようじやねえ！ なんじやあこりやあ！」

俺は例のモノを指差しながら声を荒げ、スリイナを見据える。

俺たち兄妹よりも色素の薄い金髪、それを肩の辺りで切り揃えてウェーブをかけた髪形。雪のよう白い顔はおつとりとしていて、見る者に癒しを振りまく。いまの俺は癒えないけどな。身体は平均よりは少し上ぐらいだと思つ。まあ、発展途上つてところだ。で、その発展途上の身体の上に高等部の制服を身に着けている。

そんなスリイナは俺の声にビクッとながら、

「……何って、北京ダックだよ？」

例のモノの正体を口にした。

そう、 そうなんだ！ こいつは北京ダックなるものを持ってきやがつたのだ。おかしいだろ？ 朝食に北京ダックっておかしいだろ？ 本場中國の人でも食わないと思うー

「……何って、北京ダックだよ？」

俺が内なる世界で突つ込みを繰り出しているあいだだらうと、現実世界では時が流れ続ける。

スリイナは、俺のそんな心中突つ込みを沈黙として受け取つたらしい（まあ当然だけど）。大事なことなので一度言いました風にもう一度北京さんを紹介してきた。

「あのな、そんのは見れば分かるわ。俺がなんじゃあこりやあ！ って言つた理由は、なぜにこれを朝食としてチョイスしたのかつてことだよ」

そこはぜひともお答え願いたい。北京ダックはどういう経緯で朝食にセレクトされたのか。個人的にとても気になる。

俺に尋ねられたスリイナは、若干申し訳なさげに言葉を紡ぎだす。

「あのね、昨日の余りなの……。ごめんなさい」

「な……つ！ あ、余りだとお……」

俺はそれ以上言葉を続けられない。

なんだって？ ペ、北京ダックが余るつてなんだ？ どういうことだ？ 一体どんな食卓だつたんだよ、昨日のフォシルニアクス家。……まあ、でも、余りなら仕方ないかもな。捨てるのはもつたいないし。

貧乏気質な俺は、余りという言葉に弱い。もつたひ精神が底から湧き上がってきた。

「スリイナ、謝るな。別にいいって。こんなもの食えるつていうのは逆にありがたい。高級なことに変わりはないんだからな。余りで結構コケコツコーつてな」

そう、俺は最初ギヤーギヤーとわめいていたが、これは立派な高级料理。何を文句言う必要があるってんだって話だ。

「そう? ならよかつたあ……」

ライ麦畠のように穏やかな笑顔を浮かべるスリイナ。さてと、スリイナの顔に笑顔が戻ったことだし、さっそくいただきますをしようと思つてやめる。

リールが食卓にいないじゃないか! どこに行つたんだ……つてそういうえばさつき、リールの部屋のドアが閉まつてたような気が……。つてことはもしかして……まだ俺にパンツを見られたつて誤解してるので? それで恥ずかしくて部屋に閉じこもつてることなのが……?

うん、まあ、多分そつだらうな。リールは大雑把に見えるけど、以外に纖細な子なんだ。……つたく、ホントにしうがない奴だな。けど、そういううどこが可愛いんだよな。

「じゃあ俺、ちょっとくらリールのこと呼んでくるからな」

「うん、分かつた。でも冷めちゃうと美味しくなくなるからね」「あー……確かに、冷えた鶏肉つていうのはあんまり美味くなさそうだな。

「よし、分かつた。即行で戻つてくる」

俺は返事を返してリールの部屋へ向かう。

はてさて、どうやつてリールを部屋の外に出そうか? 怒鳴つて引きずり出すのは論外だし……じゃあ謝るか?

……んー、パンツを見ていないので謝らなければならぬってことに対してもし不満を覚えないでもないけど……でも、リールの顔をこのまま見られないのつていうは、もっと問題だな。

「うん、謝りう。そうすれば全てスムーズに済むはずだ」

方針を固めた俺は、田の前に迫つたリールの部屋のドアを見て、一度だけ深呼吸。

それから、俺はリールの部屋のドアを二回ノックした。

「おーい、リール。出てくれないか? 俺が悪かつたよ。『め

んな。兄ちゃんに顔を見せてくれないか？ ちゃんと謝りたいんだ」「どこまでも優しいトーンで呼びかけると、

「……ほんと？」「

ドアの向こうから、どんな楽器よりも素晴らしい音色が聞こえてきた。ああ、ウイーン少年合唱団よりも綺麗な声だ。俺は聞き惚れながら言葉を返す。

「……ホントだとも。大体、なんで俺がリールのパンツを見てニヤけなきゃいけないんだ？ リールのパンツなんて洗濯物で見放題だぞ？ どつぐの昔に耐性ついてるから、俺はいまさらニヤけたりしないぞ？」

「フイー兄ちゃんなんか死んじゃえればいいのに…」

「え？ いまなんて」

なんかリールの口から汚い言葉が出たような……。

「だーかーら！ フイー兄ちゃんなんか死・ん・じや・え・ば・い・い・の・に！」

「ぐうあ…………し、死んじゃえればいいのに、だと……？」

な、なんでリールは怒ってるんだ？ お、俺は何か間違つたことを言つたのか？

「り、リール？ 俺はほんとにニヤけてないんだぞ？ というより実を言えれば、さつき兄ちゃんはリールのパンツを見てないんだ。ホントなんだ信じてくれ！」

「そ、そういうことじやないもん！ 私の洗濯物のパンツ、その、見てるって……も、もうホントに知らないもん！ フイー兄ちゃんの色情狂！」

し、色情狂……。俺、いまリールに色情狂って言われた？ け、けどなんか、あんまりダメージを感じなかつたぞ。……うん、リールにそういう扱いを受けるのも結構いいかも。あは、あははははつて、いやいやいやいやいやちつがう！ 早くリールの顔を見たいんだろ！ 俺はいま、何に目覚めようとしていた？ あ、危なかつた……。危うくダークサイドに墮ちるところだつたぜ。

……いや……まあ……もつ踵ちてるんだけどな。

でも、いまはそれをさておくことにして、そろそろ本気で謝らな  
いところはマズイな。

俺はリールの部屋のドアに向かつて誠意を込めて頭を下げる。

「リール。本当に悪かつた。女の子なんだからパンツ見られるのは  
イヤに決まってるもんな。なのに、俺はなんにも分かつてやれなく  
て、むしろ傷つけることばかり言っちゃって……まあ、その、とに  
かく謝るよ。ごめんな、ホントに「めんな。俺が全部悪かつた！」

かなり真剣な調子で、俺は謝罪を述べた。

と、目の前のドアがギィ……と音を立ててほんの少しだけ開いた。  
俺は腰を直角に曲げる形となっているので、リールがどんな顔をし  
ているのかは分からぬ。けど

「フイー兄ちゃん」

さっきまでの怒った口調じゃなかつた。いつもの無垢で可愛いリ  
ールの声だつた。俺はホッと一息ついてから、「なんだ？」と頭を  
下げたまま尋ね返した。

「あのね……」

言いながら、リールは部屋のドアを最大まで開く。

依然として俺は床を見たままだが、リールの足が俺に近づいてく  
るのが見える。……何されるんだろ？ もしかして頭なでなで？  
いやいや、なんでそんなことされるんだよ！

こんな状況にも拘わらず、セルフノリ突っ込みをしている俺。

対しリールは、そんな俺を戒めるかのように勢いよく部屋から飛  
び出してきて

「えいっ！」

なんとも可愛らしいかけ声とともに俺の両肩を押してきた。

押された俺は、唐突過ぎたために身構えることもできず、そのま  
ま後ろにひっくり返つてしまつ。まるで、凄腕の武術の使い手にわ  
けも分からず倒されたかのような感覚に陥つてしまつた。

「えへへっ、早く朝ご飯食べよ？」

リールは、それで許したからねと言わんばかりのしてやつたり顔で俺を見下ろしてくる。

「……やっぱり、リールはそういう笑顔が一番だ　　って、ああっ！」

「ん？　フリー兄ちゃんどうしたの？」

「い、いや！　なんでも！　それよりもあれだよあれ！　今日の朝食は冷めないうちに食べた方が美味いってスリイナが言ってたぞ？　だからほり、リールは早く行きなさい」

「……変なフリー兄ちゃん。でもいいや！　朝ご飯！　朝ご飯！」  
いつもの元気な声を発しながら、リールはスタスターと階段を下りていった。

「つたく、リールは最後の最後で甘いなあ……」

俺はこらえていた苦笑を表に出した。

だつてリールの奴、最後の最後、仰向け状態の俺の眼前に立つたんだぜ？　どうなつたかは察しがつくだろ？

そう、今度こそ俺は、おもいつきりリールのパンツを見てしまつたわけだ。

ちなみに白でした。

というより白しか持つてません！

毎日洗濯機回して、毎日洗濯物干してる俺が言うんだから間違いない！

リールのパンツを叩撃してから一分後、俺は食卓にいた。無論、朝食のためだ。

食卓は一度に四人までが使用可能な、まあ、つまりは至つて普通の四角いテーブルだ。席は俺とリールが並んで座つて、スリイナは俺の対面。

この通り、俺たちはもう完全に席へと着いている。けど、まだ北京ダックさんを口にしてはいない。

スリイナによる、北京ダックさんの正しい食い方講座が開かれているからだ。

なんでも、北京ダックさんは皮だけを食べるらしい。そいだ皮とネギとタレを薄い生地みたいな奴にくるんで食べるんだとか。オサレだことオサレだこと。庶民には無縁の食べ方だな。

「説明はこんなところかな。さあ、もう食べてみていいよ」

北京ダックさん講座が終わつたようなので、俺はさつそくいただいてみることに。

えーと、この薄皮の生地に……ダックさんの皮と千切りされたネギ、それとタレを乗つけて……あーん。

俺は完成系を口の中へ運んでみた。

「……あ、美味い」

フィーニット・ストルス、一五歳。食の階段を一段上る。うむ、北京ダックさんとはこれからも末永くおつき合いしていきたい！ そう思えるほどに、北京ダックさんは美味かった。

リールも「おいしい！」と言つてている。

俺たち兄妹の反応に、スリイナは胸を撫で下ろしていた。

そのあと俺は三つ、北京ダックさんを口にした。そうして朝食が終了したわけだが、俺は食卓の中央に君臨する裸のダックさんを見つめていた。

「フイー、どうしたの？」

ダックさんを見据える俺に対し、スリイナが小首を傾げながら尋ねてきた。

「いやせ、この身包みをはがされたダックさんはどうなるのかなあつて思つてな」

ダックさんは、まだ美味そのお肉部分が残りに残つている。「うーん、まあ……食べられるけど、普通は、もう食べない……かな。何かに加工しないと味ないしね。これは捨てようと思つんだけど……ダメかな？」

「え？ もつたいなつ！ 味なくつたつてタレにつければいいじゃんか！」

あまりにも悲惨過ぎるダックさんの末路に、俺のもつたいない精神が騒ぎ出した。

「じゃあこま食べる？」

「あ、いや、それは……」

俺のもつたない精神はどこへやら。正直、もうダックさんいらない。俺つて、朝はそんなに腹が減らない方だからな。これが夜なら喜んで食つたかもしぬないけど。

でもだからといって、これを夜食つのかと聞かると、それもちよつとあれだな……。

だつてさ、この状態のまま保存してたら……なんとなくだけど、悪くなりそうじゃないか？ 冷蔵庫に入れてたとしても、ダックさんは身がむき出しだからさ。なんとなく食べる気が起きないっていうか……ね？ 分かるでしょ？

だから、ダックさんの末路は……

「……スリイナに託す」

「分かつた。じゃあ私、一回家に戻るね」

スリイナはダックさんの皿を両手で持つて、リビングを出て行つた。

さよなら、ダックさん……つー

ダックさんに哀悼の意を捧げ、それから俺は自分の部屋へ向かった。制服に着替えるためだ。

俺はマジシャンもびっくりするほどの速さで着替えをした。

嘘だけど。本当は一、三分かけてゆっくりと着替えました。

そのあとは勉強道具をカバンに詰めて、あーあ学校ヤダめんどいって思いながら再びリビングへ。

どうやら、まだスリイナは来ていないようだ。けど、もういつも登校時間になつたので、俺は毎朝の日課をしてから外へ出ることにした。そうすればスリイナもちよどよく来るんじゃないかなと思う。

で、その日課とはなんぞやと言えば、父さんと母さんの遺影に挨拶をすることだ。

「リール！」

父さんと母さんへの挨拶はリールと一緒に行う。もう何ヶ月と続いている、俺たちの日課中の日課。欠かせない朝の行事といったところだ。

リールもこの時間になると呼ばれることが分かつてゐるんだろうな。すぐに俺の下へと駆けてきた。

そうして、俺たち兄妹は並んで父さんと母さんに黙祷を捧げる。俺は軽く目を閉じた。

……父さん、母さん。人殺しなんかしてしまつてホントにごめんなさい。でも、リールのためなんだ。リールに何不自由ない生活をさせてやるためにんだ。……って言つても怒るよな……。いや、それはそうだよ。俺は人殺しなんだから。怒られない方がおかしいんだから。でも、でもさ……罪なんかあとでいくらでも償うから……だからいまだけは、いまだけはこのまま……見守つてて欲しい。せめて、リールが大人になるまでは……このままでさせて欲しい。父さん、母さん……毎回毎回こんなわがまま言つてホントにごめん。でも絶対に、絶対にいつか償うから、だからいまだけは許してくれ……。

「いつもと同じことを思ったのち、俺はゆっくりと田を開く。

「……行くか

「……うん

静かなやり取りを行つたのち、俺とリールは外に出た。すると予想通り、ちょうどよくスリイナが俺の家の前に到着したところだった。

俺たち三人は、いつも通りに学校へと出発する。

今日はよく晴れた田だ。雲なんて一つたりともな あつた。ごめんあつたわ。一つだけあつたわ。なんかダックの形した雲あつたわ。

俺は何気なく、その雲に向かつて十字を切る。……アーメン。でもまあ、それでも快晴なことに変わりはない。実にすがすがしい。

いつもと同じ通学路を歩きながら空を見上げていた俺は、そう思つた。

それから、俺は空に向けていた顔を自分の左右へ向けた。左にはリールがいて、右にはスリイナがいる。

なんで小学生のリールが俺たちと一緒に登校しているのかと言えば、通う学校が同じ敷地内に存在しているからだ。

リールは初等部六年生。俺とスリイナは高等部一年生だ。

まあ、いわゆるエスカレーター式つて奴だ。生活が苦しかつたっていうのは、ここせいでもある。学費がバカみたいに高いんだよ。でも、人を殺すようになつてからはだいぶ楽になった。というよりも、殺しに手を出していなかつたら、俺たち兄妹はここに通えなくなつていたと思う。

だから俺は、人を殺したことを後悔してはいない。裏世界に手を出して良かつたと、まだ慣れないところもあるけど、大方そう思えるようになつてきている つと、またリールの隣でこんな汚いことを考えてしまった。ダメだダメだ。別の話題に別の話題つと。えーと、何かないかな…… あつ！ これでええやん！

「なあ、  
スリイナ」

「ん、何?」

「前々から気になつてたんだけどさ……」

俺は新たな話題として、いままで、一つと氣になつて、いたことをスリイナに尋ねてみるとことにした。俺は何年ぐらいこのことを気にしていただろうか？……んー、かれこれ一〇年近くは気にしていたかもしれないな。

で、その質問っていいうのは、

.....なんでお前歩きで遅いんでんの？

スリイナはいいとこのお嬢さんなんだ。『ぐ当たり前のように執事さんやらメイドさんやらがいるようなお屋敷に住んでいる、いいとこのお嬢さんなんだ。娘のためだけの送迎車なんてものがあつたとしてもまったくおかしくはないはずだ。スリイナの家には車がない、つてわけでもないんだ。むしろ逆で、スリイナの家のガレージには、ディーラーか！ と叫んで突つ込みを入れたくなるほど数多くの高級車がある。

それなのにスリイカは車で通学しない

備はその理由を前々から聞きたがてた

龜の間ハ二箇あるスリイ一其ハ「三」ト云ハ二、三其ラ「三」<sup>ミ</sup>。

「ハニ。頃お母のかい帯を佩ひて二度とがわぬ。ほら?」

恥ずかしい理由なのか?

「頬んじゅつたら、ビクンするつていうんだ？」

気になつた俺は、促しをかけてみる。

けど、スリイナはつづむくだけで、その続きを言わなかつた。

隣でリールも話を聞いていたと思うので、俺はリールの方に顔を向けて「何でだと思う?」と聞いてみたのだが、「なんとなく分かることない!」といったら子のような表情で言われてしま

つた。その表情が可愛かったのは言つまでもない。

ところで、送り迎えを頼んじゃつたら、それが一体なんだというのだろう？ そういう言ひ方をするつてことは、こうして毎朝歩いていくことに何かしらのメリットがあるということなのか？ でも、そのメリットをスリイナは恥ずかしくて言えない。

……恥ずかしいメリット？ 歩くことで得られるメリットで恥ずかしいもの？ それは一体なんだ？ ……んー、全然分からん。まずは、歩くことで得られるメリットだけを考えてみるか。それでそこから恥ずかしいメリットを抜き出してみれば、それがビンゴの可能性だつてある。

でもそれじゃあ、歩くことで得られるメリットってなんだ？ すがすがしさ？ 健康？ 体力作り？ つて あ！ 分かった！ あるじやん！ 歩いて得られるメリットで、だけど人に知られるのは少しだけ恥ずかしいこと。あれだよ、あれ。もうお分かりだろ？ え？ お分かりじゃない？ なーに、簡単なことさ！ それは「ダイエット！ そうかそうか！ スリイナはダイエットのために歩いてたんだな！」

俺は上から目線にものを言い、勝手にダイエットだと決めつけた。てか、それしかないだろ！ 人に言うのが恥ずかしいメリットって！

「ち、違うよ……私は……」

「何つ！ 違うのかよ！ じゃあ一体なんだつてんだ！」

「あ、それはね……その……」

スリイナは以前モジモジ状態。

「なんださつきから……もしかしてトイレか？」

もしそうだとしたら、そのモジモジを恥ずかしさとして捉えた俺の推理は根底からくつがえされることになるな。

「ち、違うよ！」

どうやら違うらしい。じゃあ俺の推理は正しいはずだ。何か恥ずかしいことがあるからこそ、スリイナはモジモジしているというわけだ。しかしながら、最有力候補のダイエット選手が即刻退場して

しまつたからなあ……これは迷宮入りかねえ。スリイナはホントのことを話してくれそうにないしな。

それにかく言つ俺も、これ以上追求する気がなくなつてきたし、もう、この話はいいか。

「……まあ、違うくともなんでもいいけどさ、スリイナにはダイエットなんかこれっぽっちだつていらないからな？ 僕はそのままでいいと思うからさ」

もしかしたら本当にダイエットのためなのかもしれないのに、一応フォローを入れてみた。けど、いま言つたことは本心だ。スリイナはいまのままで十分に可愛い子だからな。

そもそも女子はみんなダイエットダイエット言つているが、僕はモデル体型が嫌いだ。普通でいいよ、普通で。なあ？ みんなもそう思わない？

「このままで……いい？」

スリイナが、俺の言葉を確認するかのように尋ね返してきた。それに対して、俺は一つ頷いてから返答する。

「ああ、そうともさ。スリイナはスリイナのままでいい。何も変わらないでいいんだ……」

俺は殺人鬼になつてしまつた。前とは比べ物にならないほどに変わつてしまつた。それはもう、普通には決して戻れないほど酷く変わつてしまつた。

だから、周りには何も変わらないで欲しい。俺を受け入れてくれるところだけは、何も変わらないで欲しい。

あくまで俺の、殺人鬼の願望だが、そんなクズの願いでも叶うといつのならば、周りだけは何も変えないでもらいたい。

そう考へると、さつきスリイナにした『……なんでお前、歩きで通つてんの？』っていう質問は……いらない質問だったのかもしないな。

だつてさ、俺は何も変わらないで欲しいんだ。それはつまり、一緒に登校するこの風景だつて変わらないで欲しいってことなんだか

らな。

つたく……数分前の俺め、何も考えずに余計な質問しやがつて。……ま、撤回すればいいんだよな、うん、さつきの質問は撤回するに限る。

「あの、それでさスリイナ。さつきの質問だけど、あれはなかつたことにしてくれ。俺はこのままがいいんだ。スリイナの一緒のこのままがな。だからさ……あの、これからも一緒に……」いつやって登校してくれ」

言いながら、俺はもの凄く恥ずかしい台詞だと気づいた。くそつ、絶対赤くなってるだこれ……。ああもう、ホントに恨むぞ！ 数分前の俺め！

俺はスリイナから顔を逸らそうとしたが、自分から頬みごとをしておいて顔を逸らすつていうのは凄く失礼なことだろうなと考え、なんとか逸らさず現状維持を続けている。

そんな恥ずかしそうな俺を見たスリイナは、何やら嬉しそうに微笑んだ。

「うん、いいよ。私だつてこのままがいいから……」

そう返答してくれたスリイナの顔は、心なしかまた赤くなつている気がする。

……きっと俺の恥ずかしい台詞のせいだ。こうこうのつて言われた方も恥ずかしいんだろうし……。あとさ、スリイナの台詞もちょっと恥ずかしい感じだつたもんな。スリイナはいましがたの俺みたいな感情を味わつてているのかもしれない。

でも俺はさ、そう言われて正直嬉しかつた。……けど、その言葉は殺人を犯してた俺にじやなくて、幼なじみとしての俺に言つてゐんだろうけどな。

したがつて本来は、俺にその言葉を受け取る資格なんてないのかもしれない。

だけど、俺はこの場では……何気ない日常つていう一番大事な時だけは ずっと前の自分で居るつて決めている。殺人なんていう

非人間的な行いをしていない時の自分で居続けるつて決めてるんだ。  
だから……凄い身勝手かもしれないけど、俺はスリイナの言葉を  
受け取る権利行使させてもらつ。

そして、俺なんかにはもつたひない言葉を受け取つたのだから、  
俺はスリイナに言わなければならぬ台詞がある。

「ありがとな……」

「ううん。どういたしまして……」

「おお……照れくさい……。俺は今度こそ我慢できず、スリイ  
ナから顔を逸らした。

そうして、明るくもそこはかとなく暗い雰囲気となつてしまつた  
ところで、

「ふんっ！」

リールが、面白くない！ といった感じの効果音を上げた。  
おつと、そういうえばリールが仲間外れになつていただじやないか。  
これはいけない。

俺は急いでリールの方を向いて、

「リール。リールもずっとこのままでいてくれるか？ 特にリール  
は俺にとつてたつた一人の家族だからな。もしリールがいなくなつ  
たら……その時は兄ちゃん、泣くからな？」

リールの顔を見据えながら俺が真剣に告げると、リールは不機嫌  
だつた表情を一変させて満面の笑みを浮かべた。か、可愛い……。  
「フィー兄ちゃんホント！ 私がいなくなつたらフィー兄ちゃん泣  
いちゃうの？ そんなに私のこと大事？」

何を言つてるんだこの子は！ そんなことは……そんなことはあ

「当然だろ！ 当然過ぎるぞ！ 当たり前のこととも大事だ！  
だからリール、俺の前からいなくなつててくれるか？」

「うん！」

リールはニイと嬉しそうに笑つてくれた。……これは、俺が必要  
とされてゐる証として受け取つてもいいのだろうか？ どうなんだ

るの……？ もうがんばつて取るのよ。子に乗り越えてもなんじやなかろうか。

まあ、でもいいさ。リールが俺を必要だと思つてこようが思つてなかろうが、そんなことまあまつ関係ない。なぜなら、俺のするべきことは何も変わらないからだ。

リールに向不自由ない生活を。  
これが俺の生きる理由だから。

いつもとはだいぶ違った雰囲気での登校となってしまったが、何はともあれ、無事に学校へ到着した。

当たり前だが校舎が違うので、ここでリールとはお別れだ。

「いいか、リール。お前をイジメてくる奴とかがいたら、すぐ俺に言えよ。そいつをこらしめてやるからな。兄ちゃんはいつだってお前の味方だ」

幸い、いまのところリールにそんな兆候は見られない。けど、もしもリールがイジメなんてものに巻き込まれたら……俺は、そのいじめっ子をこらしめるどころじゃ済まないことだろ。

といった具合に結構物騒なことを考えていると、リールはまぶしい限りの可愛らしい笑顔を振りまいてきた。

「大丈夫だよ！ もう、フイー兄ちゃんは心配性なんだから。イジメなんでものと私は無縁だよ、無縁！ それどころか、私モテモテだもん！」

言い終わると、リールは踊るように校舎へと走っていた。

「も、モテモテだとお……？」

そ、それはそれで許すまじだなあオイ！ ボウズどもめえ！ リールに変なことしたら俺がハツ裂きにしてやるからなあ！ ……いや……でもまあ、あれか？

「イジメられるよりは……マシ、なのか？」

俺がそう呟いた時には、もうリールの姿は初等部の生徒たちの中に紛れ込んでしまつていて、完全に見えなくなつていった。

俺はそのことに若干の寂しさを覚えた。なんかさ、リールがどうかに行つてしまつたみたいだよ……。

しかしモテモテかあ……初耳だよ……。

俺は今世紀最大のため息と言つてもいいくらいのため息をついた。

「やっぱりお兄ちゃんとしてはつらいの？」

そのため息を見てか、スリイナが様子を窺うように尋ねてきた。  
俺はもう一度盛大にため息をついたのち、うめくように言葉を返す。

「……そりやそうに決まつてんだろ？が。もつらうなんてもんじやないな……。だつてあれだぞ？ スリイナに好きな奴がいるかどうか知らないけどさ、もしいるなら、そいつがハーレム状態つてことだぞ？ つらうよりもつらうないか？」

そう告げてみると、スリイナは悲しそうに顔をしかめる。

「……フィーがハーレム状態か……確かに嫌だね、そんなの……ん？」

「な、なんで俺がハーレムなんだ？ 俺は、お前の好きな奴がつて言つたんだぞ？」

「あ、その、えと、そ、そうだね。フィーじゃないね。『ご、ごめん……』

スリイナは慌てたように前言撤回すると、顔を赤く染めてうつむいた。

……つたく、恥ずかしい間違い方すんなよな。にしてもびつくりしたあ……。スリイナが俺のこと好きなのかと思つたじやんか……。ああ、なんかもう！ 俺も照れくさくなつてきただぞ！  
「さ、先行くからなつ！」

俺は足早にスリイナから離れる。振り返りもせず校舎にまっじがら！

早くあいつとバカトークをして、この照れくさをなぐさなければ！

一人の男を頭に思い浮かべながら、競歩のように歩くこと一分。俺は教室に到着した。自分の席へと向かい、机の横についているフックにカバンを下げた。

えーと、それであいつは……何つ！ まだ来てないだと！

俺の探し人はまだ来ていらないらしい。くそつ……なんでこういう時に限つていしないんだよ。来なくともいいタイミングとかでは出で

くるくせに……。

ああこれじゃあスリイナが先に来ちゃうじやんかあ なんて思つてるとほり、来ちゃつたよ……。

走つて俺を追いかけてきたらしく、スリイナは少し息をあげていた。ホントは席に着いて休みたいだろつに俺のところへ直進してきて、

「フイー、『めんね。変なこと言つちやつて……』

だとさ。やう言われた俺は一体どうすりやいいんだ？ 別に俺、怒つてないのに。ただ単に照れくさくて逃げただけなのに。でも、そうやって説明すんのもまた恥ずかしいし。ああ、ホントにどうすりやいいんだ……。

と考えてゐあいだ、現実から見れば俺は沈黙しているわけだ。そしてスリイナは、どうやらその沈黙を無視だと受け取つたらしい。

「あの、ほ、ホントにごめんね……」

震えた声音で言い残して、スリイナは廊下へ走り去つていつた。ドラマみたいだ……つて客観的に見てる場合じやないよな、これ。やつぱこれつて追いかけるべきなのか？ ……べきだよな。

追いかけようと決意して俺は立ち上がる。足を廊下に向けて、教室の出口から駆け出そうとしたその時

「おいつー二ツ！ スリイナさんが泣いてたぞ？ お前何しやがつた！」

ああもう！ なんちゅうタイミングなんだ！ 俺の言つてたことが分かつたか？ こいつは マイケルはこういう奴なんだ。

もう知らん！ こんな奴の身体描写はしてやらん！ ……でも、ちょっとだけかわいそまだから、一つ特徴を言つてやることにする。えーと、こいつの特徴は……あー、特徴は……その、うん、口

い。

身体描写じゃないじゃんつて突つ込みは受けつけないぜ。マイケルは君たちの心でそれぞれの形に創造してくれ つてこんなこと

言つてゐる場合じゃねえええええ！

スリイナだ！俺はスリイナを追いかけないといけないんだ！

「あ、分かつたぞーつ！お前、我慢できずに入スリイナさんに手を

」

「出してないつ！」

俺がバスケット選手並みの追い抜きをかけようとするも、マイケルの素晴らしいディフェンスで廊下に抜けられない。

「じゃあ何したんだよ？ ま、まさか！ ここでスリイナさんを罵倒して泣かせて、それで快感を得ようとしたのかつ！」

「どんなサディストだ！ そもそも俺はニユートラルだ！」

「なんと！ フィーニット君はニユートラルらしいですよーつ！」

なんて大胆なんでしょう！ ょつ！ このニユートラルツ！」

マイケルは教室中に聞こえるようにわざと声を張り上げた。

バカか？

「お前な……ニユートラルつて中間つて意味だからな？ そんな風に言いふらされても、俺はまったくダメージを受けないからな？」

「何！ じゃあお前マゾか！ こんな羞恥プレイにも耐えるとは……末恐ろしい奴だ！」

「だからニユートラルだつて……」

もういいや……疲れた。

何この、廊下に行きたい奴とそれを必死に阻止しようとする変態の図。

それに俺、なんで廊下に行こうとしてたんだっけ？ ま、いいか。忘れるつてことは大したことじゃないんだろう。うん？ いや、大したことだった気が……ど忘れつて奴かな？ いきなり考えてたことが消えてなくなつたよ。

廊下に行こうとして老化つて奴だね。

……ごめん、謝る。

にしても、なんで俺は廊下に行こうとしてたんだろうか？ いまのは狙つてないよ！

もういいやいいや！ なんで廊下に行こうとしたのか？ そんな理由は考えても出てこないな、うん。

それにあれば、時計だつてもうすぐHRって時間を指してゐるしな。これから教室の外に行つたつて何もできやしない。だからスリイナも帰つてくるだろ つてそう！ スリイナ！ スリイナじやないか！ 俺はスリイナを追いかけようとしてたんじゃないか！ いやあ、モヤモヤが一気にスーとなくなつたぜ！

お、噂をすればなんとやらだ。スリイナが帰つてきた。まあ、時間には厳しい奴だからな。……さてと、謝罪と弁解をしに行くか。あいつが廊下に飛び出していつたのは、俺の沈黙のせいだつたもんな。

俺はスリイナの席へ向かう。

机の真横に俺が立つと、スリイナはハツとした表情を浮かべながら俺の存在に気づいた。けど、顔をすぐ別方向へ逸らした。

……顔を逸らした行為には、どんな意味が込められていたんだろう……？

涙を流した目を見られたくなかったのか。それとも怒つてゐるのか。いや、どちらだうと関係ないな。だつて 俺が泣かせたことに変わりはないんだからさ。

「……スリイナ、その、『めんな

俺が謝罪を述べると、スリイナは驚いたようにこちらを向いた。スリイナの穏やかな瞳は若干ながら赤みがかつていて、まだうつらと涙が残つていた。

顔を逸らした理由はどうやら前者 泣き顔を見られたくない、の方だつたようだ。

「……謝らないで。私がフリーに変なこと言つちゃつたのが悪いんだから」

またスリイナは謝つてくる。いつもだ。どつちが悪いとかあんまり考えずに、スリイナはいつも勝手にとにかく謝つてくれる。それが悪いとは言わないけど、たまには謝らせろ！

「何言ってんだよ。今のは誰がどう見ても俺が悪い。ちょっと考え  
『』としてたとはいって、俺はスリイナの言葉を無視したんだ。そのこ  
とに変わりはない。だから俺が悪い。ホントに『』めんな  
「だ、だからフイーは謝らなくていいんだってば。私はもう気にし  
てないからあ」

俺が頭を下げる、スリイナは焦つたように言葉を発してきた。  
『』どうやらホントに怒っていないらしい。なら、お言葉に甘えて謝罪  
はここまでにしどくか。

俺が頭を上げると、スリイナは安堵したかのように胸へ手を押し  
当てていた。

「そこまでのことかよ……」

「そこまでのことだよ。悪くない人に謝られても困るだけだもん」

「だから悪いのは俺だつ……」

そこまで言いかけ、俺は折れることにした。『』のままだと水か  
け論になりそうだからな。

「『』の話は『』まで。埒が明かないつたらありやしない。もう悪い  
のは『』もつてことでいいか?」

「まあ……それなりいいよ。でも、ホントは全部私が悪いんだから  
ね?」

「へいへい……もう勝手にそう思つてればいいや」

俺が呆れて呟くと、スリイナは「やつたー」ともうわけの分から  
ない反応を示していた。

けど、俺も俺で満足している。スリイナの笑顔を　癒しをくれ  
る優しい微笑みを見ることができたんだからな。スリイナもリール  
と同じで、にこやかな方が似合つてゐるし……その方が可愛い。ま、  
口が裂けても言えないことだけど。

「じゃ、俺は席に戻るから」

「うん」

そう告げて、俺は自分の席に戻る。その途中、マイケルが下卑た  
笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「どうだつた？ 怒つてたか？ フィーなんて死んじやえって言われたか？」

「言われてない。マイケル、お前の田は節穴か？ 見ろよスリイナの顔を。あの顔で死んじやえ、とか言つわけないだろ？」「ここからだと横顔しか見えないが、スリイナは確実に機嫌よさげだ。もの凄くニコニコしている。

「そうかそうか。それは変なことを聞いたまつたな。……いや、ただな、あの顔でフィーなんて死んじやえって言つプレイでもしてたんじやないかと思つてよお！」

「どんなプレイだ！ あんなニコニコした顔で死んじやえって言つ奴があるか！ もしそうだとしたら、スリイナ生粹のサディスト過ぎるだろつ！」

あははっ！ フィーなんか死んじやえ！

と言つスリイナを想像してみた。

……怖つ！

「でもよお……あの顔でうだつたら、それはそれでアリだよなあ……」

えへへへへ、と笑い始めるマイケル。……気色悪い奴。

一刻も早く関わりを絶とうと考えて、俺はマイケルの席から秒速一メートルの速度で離れていく。

そうして俺が自分の席に着いたところで、担任の先生がやつてきた。

あーあ、また退屈な時間が始まるのか……。

唸りさせてくれ。今日の午前の授業は内容が濃すぎたんだ。どのくらい濃かつたかと言うと、薄めないカルピスの原液ぐらい。これで理解してもらえると嬉しい限りだ。

「ああああうううう」

俺は机に突つ伏して唸り続ける。

と、そんな俺の隣に突如ふわっとした雰囲気を持つ何者かがやつてしまふ。俺の印づ印にて二つなオーラを発する者は一人しか一人ない。

「フイー、お弁当食べよ?」

もう例のごとくスリイナである。俺は机とコンニチハしながら、「今日はなんですかあ？」

くれているからな。

「余はサントシモたれ」

……サンディッチ選手、中西田のローテで回ってるなあ。サンディッチはスリイナのレパートリーの中でエース格のようだ。あ、これは別にサンディッチに飽きたとかじゃないぞ？ 美味いからいいんだ。

「どれどれ、サンディイッチの献上を許可する」

「えへ！ ここで食べるの！ …… 屋上に行かない？」

来た来た……天気がいいとすぐどこか別のところで食いたがる。

別にここでいいだろ？ 机があるんだからさあ

「そろそろ、机がある方がスリインガさんを食いやさしよな、それ  
に最高の羞恥プレイだ！」 なあ、フィーニット

## 唐突に現れた変態の言葉。

前なあ  
ヤケル、

乱入してきた上に、その乱入方法がお下劣トークと来たもんだ。

俺は心底呆れる。

未だ机とコンニチハしたままの俺には見えないけど、きつとスリイナは顔を真っ赤にしていることだろう。お嬢様だからか知らないけど、スリイナはその手の話にまったく免疫がないんだよ。

「おいマイケル、お昼以降はお前と関わりたくないって、なんだ言つたら分かるんだ?」

マイケルは昼から徐々にギアが切り替わっていくんだ。夜は大人もドン引きするほどの話をするともつぱらの噂だ。

「そんなひどいこと言つなよ。俺たち友達だろ?」

「朝だけな」

「あ、朝、だけ……?」

「ああそとも。朝だけだ」

ホントなら朝だつてつき合いたくない、といつのはさすがにかいそうなので言わないでおく。

それよりも、いまはこの工口魔人から早いとこ離れたいので、俺は机とサヨナラすることを決意。スリイナの言つとおりにしようとと思う。

「よしスリイナ。屋上に行こう」

やつぱり顔を紅潮させていたスリイナの手を取り、俺は屋上へ向かう。

「お、屋上で食つつもりだな!」

「当たり前だろ! お前のいるところでメシなんか食えるかつ!」

俺たちは手をつないだまま走り、そして屋上にやつてきた。おお、風が気持ちいい。

授業という呪術によつてかけられた呪いが、新鮮な空気によつて淨化されていくような感じた。日光が少々まぶしいが、それもまた心地よい。

まあ確かに、弁当を食つにまちようといいかも知れないな。

何より、誰もいないというのがいい。きょうび、屋上でランチ、なんて奴らはいないのさ。普通に教室とか食堂で食つてるよ。

「あ、あ、あ、あの…… フイー？」

依然として赤い顔したスリイナが、恥ずかしそうにおどじた口調で、俺に声をかけてきた。

……ああ。

俺はその問いかけだけで、スリイナが何を言いたかったのかをなんとなく察することができた。

「悪い悪い、手、握りっぱなしだつたな」

俺はスリイナの手を放す。いくら幼なじみでも、やっぱ手を握るなんてことされたら恥ずかしいよな。いまそつそつて意識したら、俺もちょっと恥ずかしくなつてきたもん。

なんて考えていたのもつかの間。

どうやら手を握っていたことはあまり関係なかつたらしく、スリイナはまだおどおどとしている。

「なあ、どうしたんだ？」

具合でも悪くなつたのかと思い心配して尋ねると、スリイナは真っ赤な顔をよりいっそう赤くさせて、

「た、食べるの？」

そう聞いてきた。え？ なんでそんな質問で顔を赤くする必要があるんだ？ 昼飯食べるに決まつてんじやん。工口野郎の前で昼飯なんか食えないからここまで来たつてのに。

「スリイナ、食べるに決まつてんだる。さあ、早くしや。ここまで来ておいでお預けはナシだぞ」

早く昼飯を渡せ。その手に持つているものを渡すんだ。

「ほ、ほんとに食べるの？」

なんだ？ 失敗でもしたのか？ でもさつきは自信満々にサンドイッチだつて言つてたよなあ。そもそもサンドイッチを失敗つてなんだよ。どじその一次元のヒロインかつて話だ。

「しつこいや。食つたら食つ。だから早くしや。お前から差し出さないつて言つのなら、俺は力づくで奪つや」

サンドイッチをな！

「わ、分かつたから、力づくはやめてね……」

どうやらやつと分かつてくれたようだ。スリイナは右手に持つた  
サンドイッチの入った弁当箱を地面に置いた。

やつと昼飯だ。俺は地面に座る。しかし、なぜかスリイナが座ら  
ない。

「ん？」  
「どうした？」  
「何してんだあああああ！」

スリイナはなぜか制服を脱ぎ始めていた。まだ九月上旬で制服が夏使用なので、もうカツターシャツがはだけて、せ、成長途中であらう谷間があ……じゃないや！

俺は慌てて目を逸らし、

「な、なんて脇脇くんなよ!!」

えええええええつ！」

なんかおかしいと思つてたら、なんちゅう勘違いを！

「俺が食うのは昼飯だっての！」  
スリイナじゃねえよ！  
それより

「アーラのん...」

「いやまあ……いいがどな」

谷間を押めましたから。

にしても……つたぐ、それもこれも全部マイケルのせいだ。あいつは学校に来ていい奴じゃないんだよ。

学校側、マイケルに永久謹慎の通達でも出してくれないかなあ……

アレが一回二回の事実ですら気が付いてしまつた。いや、それなりも俺に殺しの依頼をえてくれれば……マイ

でも、それをやめにしたついで（も、やめないか）もはぬ

飯が先だ。俺は弁当の方を向く。  
スリイナの顔は、まだ茹でダコのまゝ火照つて、

「ヤ、メシメシ」

俺はあえて何もなかつたかのよつてふるまい。

スリイナはそんな俺に合図せぬかのよつて、「「つ、うさ」とひゅつときこちなく頷いた。

そうしてやつとこたどり着いた、スリイナ手製のサンディッシュ。ハムとレタスだけを挟んだシンプルなものから、茹でタマゴをほぐした感じの奴を挟んでいるちょっと手の込んだものまで、色々な種類のサンディッシュが目の前に存在している。

俺はシンプルなハムレタスからいただくことにした。「いただきまーす」と常套句を発したのち、俺はハムレタスにかぶりつく。あ、やっぱ美味しいな……。

しみじみとそう思う中で、俺はある別のことも考えていた。なぜスリイナは俺の前で服を脱いだのかってことだ。もつき俺は勘違いってことで納得したけど、やっぱおかしいよな。

だつてスリイナは、その……お、俺に食われてもいいと思つたらしいんだぞ？ ど、どうことなんだ？ 朝、リールと別れた直後のスリイナの反応だと……スリイナは俺のことを好きじゃないはずなんだ。

なのに……なんで好きでもない奴の目の前で服を脱いだ？ しばらく思考を働かせていると、俺の中に、ある一つの単語が浮かび上がってきた。しかもそれは、いまさつきのスリイナを表現するのに最適な言葉だった。 てゆーかこれだ！ これしかないよー！ あまりにもジャストフィットするその言葉。心地いい感覚に襲われて心中で連呼しまくっていると 俺は思わず口を滑らせて、その単語を現実世界に音として繰り出しつけてしまった。

「痴女！」

「ひやー！」

可愛い擬音を発してスリイナが反応した。それからみると落ち込んでいくのが分かる。まるでアサガオが枯れていくやうを早回しで見ているようだ。 つてそんなこと言つてる場合じやなこだ。ふふ、フォローしないと……。

「お、オープンなのは……悪いことじやないと想つた？ 俺は

「ひやうう……」

どうやらフォローを間違つたらしい。  
スリイナは完全に枯れ果ててしまった。

我らは若者。

枯れ果てようが朽ち果てようが、時間さえ経てば全てを忘れることができる。学生はやることが多いのだ。

そして、それはスリイナも例外ではなかつたようだ。放課後のいま現在、スリイナは毎のことなどすっかり忘れているようだつた。立ち直つてくれて何よりだ。

帰り支度をしながらスリイナを見ていて、俺はそう思った。

さて、話は変わるんだが、放課後というのは一日の中で一番ハッピーなことが起こる時間帯なのだが、それを皆さんはご存知だらうか？ ご存知ない場合、それは人生の九割を無駄にしていること請け合いだ。

そのイベントが起つるのはもう少し先。それまで俺は、初めて球場でメジャーの試合を見た少年のようなわくわく感を抱いていようと思つ。

帰り支度の済んだ俺は、スリイナのところへ向かつ。

「さ、帰ろうぜ！」

「フリー、嬉しそうだね」

スリイナは少しバカにしたような笑みを浮かべて俺を見てくる。でもいいんだ。だつて実際、スリイナの言つとおり俺は嬉しいんだからな。隠す必要なんてない。やつと拷問から開放されるような気分と言えば分かるだろうか。ま、拷問とか受けたことないんだけどな。いや、受けた受けてないなんてこの際関係ない。いまの例え方は間違つてないだろうからな。これほど俺の気持ちを反映した言葉もないと思う。いや、もう現実が拷問そのものだといつても過言ではない。

俺とスリイナは校舎を出る。やつして、学校の校門付近で立ち止まる。

ここまで来ればもう言わなくたって分かるだろ？

一日で一番楽しいイベント。

拷問からの開放。

それらが意味することは、一人の少女との再会だ。待つこと五分。俺にとってこの五分は、今日過ぎした時間よりも長く感じられた。

「ああ、可愛い……」

俺は思わず呟く。でも本當なんだから仕方がない。初等部の校舎から出てくるどの子よりも可愛い。ああ、輝いている。あんな子が妹でホントによかった。と、ここまで言えばどんな奴でも、例えサルでも分かるだろう。

そう、俺が待っていたのはもちろん リールだ。

と、リールが俺の存在に気づいたらしくブンブンと手を振つてくる。ああ、幸せだ。たったこれだけで今日の疲労が全て吹つ飛び。リールがこちらに近づいてくるにつれて、俺の口元は緩んでいく。

「フィー兄ちゃん！」

俺の下に駆け寄ってきたリール。そんなリールに、俺はちょっと早いかもしれないが、この言葉をかけた。

「リール、おかえり」

「ただいまっ！」

口を二イと横に開き、白い歯を見せてくれる。

返事を返してもらうだけで俺は……俺は感動した！ これを言ってもらうためだけに学校に通つてると言つてもいい！

俺は身を悶えさせる。周りから『あ、またあの人だ……』みたいな視線で捉えられている気がするけど、そんなの知つたことかっ！ 可愛いものを見て悶えることの何が悪いってん……リールも引いていらっしゃる？

ふと目に入ったリールの顔は、引きつった笑みを携えていた。

……言つまでもなく、俺は悶えることをやめた。気を引き締めるために咳払いを一つ。

「うおつほんつ。や、帰ろうぜ……」

俺は勇気を振り絞つてリールに手を差し出してみた。

すると、リールは嫌がる素振りを一つも見せずに俺の手を握り返してくれた。……おお、なんて優しいんだろう……っ！

リールの手は小さいが、生きていると感じさせる力強さがあり、しかしながら纖細さも兼ね備えている温かな手だ。

その温もりを感じ取りながら、俺は歩き出す。

「スリイナ姉ちゃんのサンドイッチ美味しかったよ！」

登校の時とまるつきり同じ道を通りながら帰る道中。リールの明るい声が話題を生み出した。

「ホントホント。いくらサンドイッチは作るのが簡単だつていつてもさ、あの味を出せるスリイナの腕は本物だよな」

俺はリールの意見に乗っかる。

それを聞いたスリイナは嬉しそうな、けど自分を嘲るような笑みを浮かべながら、

「そう言つてもらえるのは嬉しいけど……でも、美味しいのはいい食材を使つてるからだと思つよ。同じ材料で作れば、フリーにもりールちゃんにだつて作れると思つなあ」

「いや、それは絶対に違つぞスリイナ」

「そうだよ。違うんだよスリイナ姉ちゃん」

兄妹揃つての反論に、スリイナは首を傾げていた。……まあ、兄妹揃つてと言つても、たぶんリールは俺の言葉をマネしただけなんだろうけどな。

なので、当然俺が続きを連ねていく。

「スリイナ、よく考えてみる。一流の料理人だつて食材は一流のものを使うだろ？ それと同じだ。いい食材使つて美味しいもんが作れるんなら、それはスリイナの腕がいいってことだろ」

「んー、そうなのかな？」

スリイナはどこか否定的に視線をさまよわせていた。

素直に喜べばいいんだよ、つたく。……もう一押しつてところだ

な。

「そりなんだよ。そもそも、いい食材を使つたら必ず料理が美味くなる、なんて保障はどこにもないだろ？ 下手な奴は高級食材だらうとダメにするだらうしな。だから、スリイナは料理が上手だつてことなんだよ」

俺がそう告げると、スリイナは恥ずかしそうに笑つた。

「そうだね。フイーがそう言つのなら、そななんだろ？ でも私、それで満足はしない。もつともつと食材を上手に扱えるようになる。なんて言つのかな……食材の味を引き出すみたいな……ね？」

「おう、頑張つてくれ。お前なら引き出せるさ」

腕を上げてもらえるのは悪いことではないからな。

しかしあ、このあとも出でてくる話題は食い物ばかり。この年代なら恋愛の話なんかがあつてもいいような気がするんだけどな。

まさに色氣より食い氣つてか。

ま、いいんだけどな。この二人の恋愛話とか聞きたくないし。特にリールのは絶対に聞きたくないぞ！ ……つと、つい熱くなつてしまつた。

でも、妹の恋愛に口を出したくなるのはどこの兄貴もそつだろ？ ……あまり賛同を得られそうにないな。だが、それは俺も分かつた上での所業だ。自分が気持ち悪いってことぐらいは分かつてる。けど、分かつていても、それでも守りたくなるんだ。リールにはそれほどどの……。

俺はスリイナと食い物の話をしているリールを一瞥する。

……それほどどの魅力があるんだからな。

はは……これがキモいつことなんだうな。

なんて考えていると早いもので、もう我が家に到着した。

「じゃあスリイナ、また明日な」

「バイバイ！ スリイナ姉ちゃん！」

「うん。また明日ね」

スリイナは楚々と手を振り、俺たちの前から離れていく。

もう毎度のことなので、見えなくなるまで手を振り続けるなんてことはしない。ある程度離れたところでお互い切り上げる。

スリイナが「ひらひら」に背を向けたところで、俺たちは家に入った。

「ただいま」

「ただいま～っ」

俺とリールは同時に声を発した。中から父さんや母さんの返事が返ってくるわけじゃないけど、挨拶はきちんとしなさいこといつ家訓の下に育ってきたから、まあ、癖みたいなもんかな。

俺とリールはそれぞれ自分の部屋へ向かう。家に帰つて最初にすることは着替えだ。脱いだ制服はきちんとハンガーにかけてしわにならないうつにする。……いつないと母さん、うるさかったなあ……。

普通に生活していると、そんな風に父さんや母さんの言動を思い出すことがある。親つていうのは、それだけ子供の生活に欠かすことのできない存在つてことなんだろうな。別にいなくなつてから分かつたつてわけじゃないけど、いなくなられてしまつて身に沁みたつていうのかな……。親の影響は大きいんだなつて改めて認識した感じだ。

そして再認識した感想だけど、やつぱり親は居た方がいい。俺たち子供の面倒を見てくれるありがたい存在だし、それに何より、俺にしてみれば……父さんと母さんさえ生きていてくれれば……殺しながら手を出す必要もなかつたつていうのにな。

けど、ここで父さんと母さんにそういう思いを抱くのはお門違いも甚だしい。殺しあくまでも俺自身が決めた道だ。むしろ父さんと母さんは、俺がそんなことをしようとしていると知つたら、間違いなく止めてくれるだろつ。無論、それは生きていればの話で、現実はそうじやない。生きていなからこそ、俺は裏の世界に墮ちたわけだ。絶望がうごめく世界にな。でも、俺の世界は裏だけじゃない輝かしい表もある。

表には父さんと母さんの残した形見がたくさんあつて、その中で

も一番大きな形見は、自宅兼何でも屋である我が家だ。近所の人たちの役に立ちたいといつ志の下に始めた『ストルス雑務店』。

俺はその志を 父さんと母さんの思いを受け継いで、今日も『ストルス雑務店』を開業しようと思つ。ホントは受け継ぐ資格なんてないんだろ？

というより、正直な話、無理に受け継ぐ必要はないんだ。だって、殺しの報酬だけでも普通に生きていけることはできるからな。

……するとここに疑問が湧いてくるよな？

なんで俺は『ストルス雑務店』を受け継いでるのか。

なんでか分かるか？ 結構ちゃんとした理由があるんだぞ。はい、シンキングタイム終了ーーー！ ってシンキングタイムなかつたじゃん！ まあ別にいいよな？ 答えを教えてやるんだからさ。

で、その答えっていうのは、隠すに隠れみのだ。  
殺し屋で十分に儲かってるけど、かとこって何もしないと極しまれるかも知れないだろ？ 俺が殺し屋をしていることは当たり前だけど誰も知らない。けど、父さんと母さんがいなことは知られている。それゆえに、『ストルスさんとこの坊主は何もしないでどうやつて生活費をまかなつてるんだ？』ってご近所さんに怪しまれかかもしれないだろ？

だからこそ、俺は『ストルス雑務店』を営業するんだ。もちろん父さんと母さんに対する思いがないわけじゃないぞ？ わつきも言つたけど、志はきちんと受け継いでいるつもりだ。半端な仕事はしない。

それを証拠にっていうか、最近は『ご近所さんからの依頼がだいぶ増えてきているんだ。俺の健気さがご近所さんに伝わってきたんだろ？』

でもあれだ、だからって殺しはやめない。依頼が増えてきたとい

つても、まだそこまで稼げるわけじゃないからな。せいぜい、ジヤパニーズお父さんの毎月の小遣いぐらいだ。

「さーて、今日も頑張りますか……」

動きやすいようジャージに着替えた俺は、一階の仕事場へ向かう。仕事場には色々な道具が置いてあって、まるでホームセンターの一角のような場所だ。

「どれどれ、今日の依頼は…………って今日はナシかよ」

留守中の依頼を承るために用意している、くじ引きに使うようなボックスを覗いて、俺は呟いた。……ま、こんな日もあるさね。

俺は売店風のカウンターに肘をつきながら、ぼけーっと依頼を待つことにした。

しかし、我が家の前を通る人々は、全員がただの通行人でしかない。

「ああ、退屈だ……なんて思つていると

「フイー兄ちゃん！」

まるで計ったかのようなタイミングでリールがやつてきた。す、素晴らしい！　さすがリール、ナイスだ！

「フイー兄ちゃん、今日は依頼ないの？」

「ううなんだよ。だからとつもなく暇だ。リール、なんかないか？」

「なんかつて何？　遊び？」

「そう、遊びだ。……ここから離れるわけにはいかないから、ここでできる簡単な暇つぶしみたいな奴とか、かな」

そう言つ俺は実のところ、リールがいればそれでいい。見てろつていうなら何時間でも見ていられる。見てるだけでも十分に暇が潰せるつてもんだ。

けど、それじゃアリールがかわいそうだ。ただ黙つて見られてるだけなんて、天真爛漫のリールにはできないし、そもそもそんなのはリールじゃない。

「うーんとねえ……じゃあ、ハンパーティ・ダンパーティの早書き競争

なんてどうかな？」

「何それ！ 初等部で流行つてんのか！」

「そりだよ！ 私一番なんだよ！」

ほほう、たすがだ。そんなマニアックそうなゲームで一位を取れるとは……。

いや、でも待てよ……？

「それって絵のクオリティはどうなんだ？ 丸に手足つけただけ、みたいなのか？」

もしそうなら、運次第で誰でも一位なれそうだけど……。

「ううん。私はほんのちょっとだけ凝つてるよ。先生、私の絵を見て褒めてくれたもん。『うわ……っ！』って！」

引いてる？ 引いてるよな？ 先生明らかに引いてるよなっ！ ってことはリール……早書きなのに凄い次元の絵を描いてるってこと？

……見たい。

「よし！ それでいいぜ！ 兄ちゃんと勝負だ！」

「負けないよ～っ！」

というわけで、第一回・ハンブティ・ダンブティ早書き王座決定戦が始まった。

カウンターに置いてあつた紙とペンをリールに渡す。俺も同じもの用意し、さあ始めましょうとしたところ

「じゃあ公式ルールの説明ね」

だとさ。俺は鼓膜が正常に機能してないんじゃないかと、我が耳を疑つたね。

だつて、公式ルールつて何？ 早く書くだけの遊びになんのルールがいるつていうんだ？ そもそも公式つて……どこが認可したんだ？

さすがに突つ込もうかと思つたが 俺は我慢した。

そりやそりや？ リールが一生懸命に説明をしてくれているんだ。これを邪魔しようなんて思う奴は鬼か悪魔だ。

で、一通りの説明が終わり、俺は聞いたルールを改めて反芻することにする。

まず、いや、まずつていうか、これ一つしか公式ルールとやらはなかつた。

「ハンパーティ？」「ダンパーティ！」のかけ合いでスタート。

どうだ？凄くシンプルだろ？

ではでは、早速始めたいと思う。ちなみに、最初の「ハンパーティ？」は挑発の意が込められているらしく、チャンピオンが言つた言詞らしい。なので、自称一番だというコールがそれを言つことになつた。

それでは改めまして……

「ハンパーティ？」

「ダンパーティ！」

戦いの火蓋が切つて落とされた。

カカカカカカカカカカ　と、ペンの走る音のみが空間を支配する。

俺はまずだ円を書いた。そこに手と足を書き足し、最後に少しおアルな顔を書こうとしたところできたらあ！」

リールがカチヤリとペンを置いた。

……おいおい、嘘だろ？　リールの描くハンパーティさんは、先生が思わず引くほどできらしい。俺のハンパーティさんなんて、どこぞのエセピカソが書いたような酷い状態だぞ？　それを上回るスピードで引くほどの絵なんて書き上げられるはずがな

「うわ……っ！」

ごめん。前言撤回。書けてます。引くほどの絵が書けてます。劇画タッチのハンパーティさんが紙の中で躍動しています。

これは……完敗だ。

「……リール、負けたよ……」

「ほんと? えつへん! 私、凄いでしょー!」

「ああ、凄いよ。もう凄すぎて神だよ」

そう言つてから、俺はもう一度リールの描いたハンプティさんを眺める。

……凄すぎる。リール、将来は画家かな? もし画家になりたいつて言つたら、俺は迷わず支援することだろ?。

「ああ楽しかつた! ジュース! ジュース!」

しかし、秘められた才能を爆発させたリール本人は、絵に興味なんてないと言わんばかりに家の中へと戻ってしまった。きっと、俺を負かしたから満足したんだろうな。

とその時

「おーい、何でも屋の兄ちゃーん!」

数人の子供の声がこだましてきた。ちえ、またあれかよ。いい加減にしろよな、まつたく……。

俺はため息をつきながら、声のした方を向く。

すると、予想通りの面子がこちらに向かってきていた。全員がNとYの組み合わさった野球帽を被つていて、手にはバッドとグローブ。まあ言つまでもなく、近くの空き地で草野球をしているガキ集団だ。

ここのところ、一丁一丁一回ぐらのペースでやつてきてくれるお得意さんだ。しかし、ここのお得意さんには正直なりたくない。だつてや、

「ボール取つてきて!」

こればっかり。しかも報酬だつて全然なんだぜ……。

「はい、A・ロッドのサイン入りボール

「はいはい、こんなショボいのいらな つて、えつ! 何で? いつもはアメ玉とかのくせに!」

俺は手渡されたサイン入りボールを食い入るよつて見つめる。

「サインは俺が書いたんだつ!」

俺は思わずそのホーリーをはるか遠くへ投げてしまつた

「今度、試合でハマリまつた」

などと抜かしてきた。俺は当然断つ

などと抜かしてきたり。俺は当然幽々としておれ。こいつら、いまのボールで野球すればよかつたんじやないの？　……バ

た報酬よこせつての。こつちは眞面目な仕事でやつてんだぞ？ こ

お前らそこなんど二分かつてんのか？」  
「それで食ってるんだからな？」

外方へかへ只で、ハ方總て經て、る韓醜をさに、る。

びりせり折つたたまれた紙のみだ。それをそのまま俺に渡していく。

土地の権利書でも持ってきたか。それならなんでもしてやるぞ。

人殺しでもな

うつ つ 一 なんて考えながら、俺はその紙を開く。

土地の権利書

これはレヘルが同じでいいよ。モーリー

尋ねると、ガキどもが頷く。

「なんでそんなもん持つてんだよ?」

ああ、今度はもう少し、本格的で、結構な話題にならんやつだ。

「あ、いや、それせりゃも黙いたけど…

「ああそれはね、今日、リールちゃんからもらつたんだ。それで、リールちゃんの兄ちゃんはリールちゃんのことが好きだつてリールちゃんが言つてたからこれあげればきっと依頼を……つて、に、兄ちゃん……？」

俺の放つた殺氣を感じたのだろうか。リーダー格のガキは言葉を途中でやめた。

実際に賢明な判断だ。

何が……何がリールちゃんじゃボケエエ　ツ！　前々から氣になつてたけど、今日は一段とリールちゃんリールちゃん連呼しそぎじゃアホがあつ！　しかもリールにもらつただとお？　こいつ何様だ？　リールにプレゼントをもらつ？　笑わせるな！　一世紀早いわ！

……いやしかし、果たしてこのハンパーティさんを、リールがコイツに渡したプレゼントだと解釈してもいいのだろうか？

俺は躍動するハンパーティさんを眺める。

リールはこのハンパーティさんを量産することができる。といふことはだ、『あー、このハンパーティさん邪魔あ、チヨー邪魔あ。でも私が書いた奴だしい、捨てんのもつたいなくない？　あー誰か処分してくんないかなあ？　あ、そうだ。あの野球バカに渡しちゃえばいいじyan！　あいつなんてえ、私にとつては焼却炉みたいな存在だしい。キヤハハハハハツ！』てな具合で、リールがコイツに渡した可能性だつてあるよな？　いや、一〇〇パーそうに決まつてるつ！　ふひひつ！　リールの中でお前の存在は焼却炉にすぎないんだよ！　いい氣味だなあ！

「ハハハハハハハハハハハハハハーツ！」

「……に、兄ちゃん？」

くそつ！　心の声が漏れた……つ！

「な、な、に、ハハハハハツ、笑いでエクササイズつて奴さ。ヒーハーツ！」

「ふ、ふーん……」

ええいっ！

ハンプティさんを見るような目で俺を見るなーっ！

「ほ、ほらー！ さつさとボール取りに行くぞー・ もつタダでいいからー！」

ホントはタダなんてありえないんだが、この気まずい空間から脱出あるにほいりあるしかなかつたんだ。

ああ、怖かつた……。

なんでいつつもあの家にボール入るんだよ。なんだっけ？ 盆栽つて奴を毎回毎回ものの見事に砕けさせてるもんなあ。てかさ、あの人も盆栽の場所変えるとかさ、色々打つ手はあるじやんか。学習しろよな、つたく。

と心で愚痴りながら、俺は家に帰ろうとしているわけだ。というより、もう家の前だ。でも家にはまだ入らない。

俺は『ストルス雑務店』のカウンターに腰かける。それから、夕闇が訪れた始めた空を見上げた。

また夜が来る。俺の本業の時間がまた近づいて来たんだ。そう考えると、少しばかりの悲しさと寂しさが俺を包み込んだ。けど、こんな感覚にも慣れたもんだ。

さてと、やりますか。この静かな仕事場じゃないと安心してできないことを。

話を誰かに聞かれるわけにはいかないからな。

俺は携帯を取り出して、ボイスチェンジャーを取りつける。何、仲介屋への電話つて奴さ。

話は一、三分ほどで終わった。

ターゲットの再確認くらいだからな。

これで表でやることは終わった。あとは家に入つて夕食だ。

夜はスリイナが作りに来てくれないから、夕食作りは必然的に俺がやることになる。別に面倒だとは思わない。たださ、俺のもの凄い下手くそな料理をリールに食わせるつてのが、ねえ……？

けどさ、リールが料理を作れるつてわけでもないからな。だから結局は、俺が作るしかないわけよ。

携帯からボイスチェンジャーを外したのち、俺は家に入った。

リビングへ向かうと、テーブルに教科書ノートを広げてリールが

宿題をしていた。

「あ、フィー兄ちゃんおかえり！」

リールはくくりとした目を細めてそう言った。

俺は嬉しく感じる反面、悲しくも思えてきた。

いつもだ。リールはいつも、父さんも母さんもいない家で――

人きりで待ってくれている。

ホントなら俺がそう言つてやりたい。俺がリールを迎えてやりたい。

「フィー兄ちゃん？ どうかしたの？ ぼーっとしてるよ。」

「あ、いや……なんでも」

まあ結局、俺がリールを迎えてやるなんてことは、夢のまた夢だ。だつてそつだ？ 俺がリールを迎えるつてことは、端的に言つて俺は一ートつてことだろ？

それはちょっと好ましくない展開だ。俺の夢は、つていうより生きる理由は、リールに何不自由ない生活をさせ続けること。だから二ートじやいかんのだ。

俺はただただひたすらに、馬車馬のように働けばいいんだ。

あ、そう考へると、やっぱりリールにはこの状態で居てもいいのが一番いいのかもしない。何せ帰つてくるたびに、俺はこうして癒されるわけだからな。それにあれだ、家にいてもらうのが一番安心できるしな。

けれど、リールにしてみればやっぱり退屈なんだろうな。俺が雑務で外に出てる時はずっと一人なわけだし。……さつきのハンブティさん早書き対決の時とか、もの凄く楽しそうにしてたもんなん……

……よし、笑わせよう！

迎えてやれない代わりというか、とにかくリールを楽しませてやるうという衝動に駆られた俺は、

「マンショնも……ダイワハウチゴ」

この前テレビでやつてた世界の面白CM集の中で、特に印象に残つたCMの決め台詞を言つてみた。

- 1 -

リールが無表情になつた。

俺は大急ぎで袋を被る。

と、リアルの笑い声が聞こえてきた。

....が、たゞ笑顔になつてくれただけにいたしやうに！  
一のツボがまったく分からぬ。でも、袋を被るだけで笑顔になつてくれるつていうのなら、俺はずつと袋を被つていっても構わぬ！

あ、ただし、寝るときは勘弁してもらわないとな。窒息するかも、  
しないか……いや……いまでも十分に……ち、窒息死できるな、  
これ。……それに、いま思えば、リールの顔が……見れないや、な  
いかい……。やつぱり袋、いますぐ『勘弁つ！

ールを破つた。

ありがたいことに、リークはそれにも笑ってくれた。

俺の意図とはだいぶ違う結果となってしまったわけだが、まあ結果オーライって奴だな。

さて、リールが笑顔になつてくれたところで、夕食を作るとしますか。俺も腹減ってきたしな。きっとリールもお腹ペコペコのはずだ。

「ごめんなさい」川せよ」と余韻な」としだやうてわしあすく夕食作るからな」「

「なんで謝るの？ 面白かったからいいよ！ でも、フイー兄ちゃんの言うとおりお腹は空いてるから、なるべく早くね！」

「お、おう！ 分かつたぜ！」

俺はマツハに相当すると思われるスピードでキッチンに移動し冷蔵庫を覗く。 ハンバーグでいいか。 焼くだけだし。

というわけで一〇分後。

我が家の中にはハンバーグとつけ合せの「ローンとポテト、それに加えてパンと「ローンポタージュ」といへ、どいまでも普通な雰囲気を持つ料理たちが乗つかつていた。

ちなみに、「ローンポタージュは粉末にお湯を注いだだけだ！」

「別に威張つて言うことじゃないな、じめん。

俺の対面に座っているリールはこれらを見て、

「美味しそう！」

だつてさ。こんな平凡な料理に対しても、リールは田を輝かせてくれる。

俺はホッとしたね。リールにそつと語つてもうえれば、これ以上な嬉びだからな。

「よし、じゃあ食つか

「うん！」

「いただきま

「いただきま

「いただきま

「いただきま

俺はまず、メインであるハンバーグに手をつける。どうやらリールもハンバーグのようだ。俺たち兄妹はほぼ同じタイミングで、口にハンバーグを放り込んだ。

「んー、まあまあだな。もつちよつと焼いてよかつたかもしねない。

そう思いながら、俺はリールの顔を窺う。俺の味覚なんかよりも、リールに合つたかどうかが重要なんだ。

「まあまあだね。やっぱリスリイナ姉ちゃんの方が美味しいよ

「さ、左様でござるか……」

「うう……毎度のことながら、結構な毒舌だぜ。

「……う、じめんな。兄ちゃん、いつになつても料理上手くならなくて……」

「ううん、そんなのどうでもいいんだよ。私はフイー兄ちゃんと一緒に、こいつって食べられるだけで十分だもん」

「……り、リール……」

俺は思わず感極まる。 やべ、涙出そう。

俺は必死に、必死にこらえてみた。……だが、残念ながらフイー・シトダムは決壊してしまった。

いま苦笑いした奴、あとでハツ裂きにしてやる。

「フイ、フイー兄ちゃん……？」

急いで涙を拭つてみたが、どうやら見られてしまったようだ。ああ、恥ずかしい……。でもや、こまのはしうがないよな？ 泣くなという方が無理つて話だ。

だつていまの言葉は、俺を必要としてくれてるつことだら？ 俺が一方的にリールを必要としているつことじやなくて、リールも俺を必要してくれてるつことだら？

それは俺にとって 何よりも嬉しい最高の言葉だ。

今後の人生において、これ以上回る感動はないんじゃないかと思うほどにな。

「リール、ありがとな……」

墮ちて破綻している俺は、いまの言葉だけで十分すぎるほどに救われたよ。

楽しい時間はすぐに終わる。

それは誰にとっても例外ではないだろう。だから俺にも当てはまるんだ。

今日も俺は、リールが寝静まつたのを確認してから都会の方にやつてきた。ターゲットについては、どうしてもこっちにこるものなんだ。

来るのが面倒なんだよなあ。片道一時間近くかかるからさ。でも、それに見合った報酬があるし、何より住んでる場所から離れてるつてのは結構重要なことだ。捕まるわけにはいかないからな。

さて、今日はどこから狙おうか。といつても、やはり上からになるわけなんだけだな。

俺はターゲットが泊まっているホテルの反対側のビルの屋上へ向かつた。

ああ、寒い。やっぱ屋上寒い。でも俺だって学習はしている。今日は長袖長ズボンで来たんだ。昨日よりはマシだ。でもまだ寒い。屋上は手ごわいなー。

とふざけてもいられない。今日は昨日のみたいに、決まった時間にターゲットが来るわけじゃない。ターゲットはもう反対側のホテルの一室にいるんだ。だからタイミングが命。窓の近くに来たところを一撃で仕留めなきゃいけない。

難易度は昨日より難しいと思う。

俺はギターケースを開けて、さっそく狙撃の用意を始める。

まず三脚を組み立てて、次に銃を組み立てて、この一つをドッキングさせて固定。それから、ターゲットの泊まっている部屋に銃口を向けて、最後にスコープの標準と倍率を合わせる。

これでとりあえずは準備完了。

あとはひたすらスコープを覗いて、ターゲットが窓際に来るのを

待つだけ。カーテンが閉まつてゐるから、ホントにタイミング命だ。

……ああ、緊張してきた。

ターゲットが来る、来ない、来る、来ない、来る、来ないと引き金に指をかけてはやめ、かけてはやめを繰り返していくと、スコープで捉えているカーテンに人影が映つた。

が、俺は引き金を引けなかつた。

……くつ、タイミングを取り損ねた。……けど、ターゲットの部屋の構造を思い返す限り、ターゲットはいま、ベッドからどこかに移動したみたいなんだ。つまり、ターゲットはもう一度絶対に、カーテンの前を通るはずだ。じゃないとベッドに戻れないからな。

だから、まだ大丈夫。次こそは、狙い撃つ。

神経を研ぎ澄ましてタイミングを計つていると、こんな時に限つて、アソツが、毎度毎度俺を混乱させるアソツがやつてきやがつた……。

こんなことしていいのか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことするの間違つてると思わないのか？

こんなこと、うるさい！ 邪魔すんな！ このタイミングで出でぐるな！

……うるさい、か？ この声をうるさい呼ばわりするのか？ お前を止めようとしているこの声をうるさい呼ばわりするのか？

俺もだいぶ堕ちたなあ。いいのか？ ……父さんと母さんが悲しむぞ？

……うるさい。リールのためだ……。

そのリールはどうだ？ 俺がこんなことをしていると知つたら…

……どうなるかな？ どう思うかな？ きっと嫌われるぞ？

そんなの知られなきやう。巻き込まなければいい。俺はそんなへマはしない！

そうか、さすがは俺。でもこの世の中そう上手いこ  
ろ！ 黙れ消え

瞬間 大気を切り裂く破裂音。

銃口からのるしのような煙が上がり、スコープを覗いていた俺の視界が真っ赤になった。

先ほどまでベージュっぽい色合いだったホテルのカーテンは、最初から真紅だったのではと思うほどに、それほどまでに鮮やかな赤に染まつた。

……俺はまた、人を殺した。あの出血量なら確実だ。もしかしたら首から上が消し飛んでるかもしない。

今回はカーテンのおかげで、吐き気は襲つてこなかつた。  
だから早々に立ち去りつと思つ。俺にはつらえてる暇なんてないんだ。

俺は銃を、三脚を、たつたいま人を殺した奴とは思えない手際のよさで片付ける。

一分も経たずに片付け終わると、俺は非常階段を駆け下りる。  
難易度が高かつた分、逃げるのは昨日よりもずいぶん楽だ。相手は一般人だったからな。黒服も何もいない。

そうして、何ごともなく地上にたどり着いた俺は昨日と  
もと同じように都会の風景へと溶け込んだ。  
もちろん、バンドの練習帰りのガキとして。

我が家に無事到着。

時間は昨日より早い。けど、高校生が帰つてくる時間とは思えないわけなんだがな。

玄関から静かに足を踏み入れると、我が家の落ち着いた匂い。これほど安心するものもない。

昨日と同じようにまず自分の部屋へ行き、ギターを隠す。

それから、リールの顔を拝みに行く。どれぞれ、癒しをもらおうかねえ。

ホップ抜き足、ステップ差し足、ジャンプ忍び足を駆使して俺はリールの部屋に近づく。ドアの前に到達し、俺は「さてさて、うへへ」と開けようとしてドアがちゅっとだけ開いていることに気づく。

「ん?」「

怪訝に思つていると、部屋の中から泣き声が聞こえてきた。

うわーんつていう大泣きじゃなくて、すすり泣くような、深夜に聞くにはちょっと怖い声が聞こえてきた。

しかしそれは当然、幽霊なんていう存在し得ないものの声じゃない。

紛れもなく、リールの声だ。

俺は部屋に入るべきかどうか悩んで、入ることにした。ひょい

とだけ開いているドアを一回ノックして、

「……リール、どうした?」

しかし、そう声をかけても返事はなく、俺は勝手ながらドアを大きく開けて部屋の中へ。

すると、リールはベッドに座りながら泣いていた。

「どうした? 何があつたのか?」

俺はリールのすぐ近くまで寄つたのち、しゃがみながら優しくそう尋ねた。

「うう……えぐつ……ふい、フイー兄ちゃん……つー

ドサッ」と、リールが俺に抱きついてきた。

いつもの俺なら嬉しいなあと顔がほころぶのだろうが、いまはまたたくほころばなかつた。俺にだつてそういう心ぐらいは残つてゐる。

「ホントに、どうした……?」

そう尋ねるしかなかつた。赤ちゃんでもあやすかのよリールの背中をぽんぽんと優しく叩きながら、俺はそつ尋ねるしかなかつた。

「……あのね、さつきトイレに起きて……戻つてくる途中に、フィー兄ちゃん寝てるかなつて思つて、部屋を覗いたらね、フィー兄ちゃんが居なくて……それから家中全部探したけど居なかつたの……それで……」

やつと紡いでくれた言葉を聞いて、俺は顔をしかめた。

俺のせいじやないか……リールが泣いてるの、俺のせいじやないかよ……何やってんだ、俺は……。リールを悲しませるのは、絶対のタブーなのに……。

早く安心させてやらないと……でもどうやつて?

人を殺しに行ってたんだ、ごめんな。

なんて正直に言えるわけがない。そうなれば当然、嘘をつくしかない。リールに嘘をつくのは……嫌だけど、でも……そうするしかない。

「……ごめんな。田が覚めたから、ちょっと散歩に行つてただけだから心配すんな。もう絶対に居なくならないからな」

言いながら、俺はリールの小さな背中をさする。

体の震えが弱くなつたことから察するに、リールはだいぶ落ち着きを取り戻してきたみたいだ。

「……ほんと?」

「ホントにホント、絶対居なくならない。だから今日もひつひつ

な?」

「うん……」

満足したように頷くと、リールは自分でベッドに横たわつた。

俺はリールの足元にあるタオルケットをかけてやつた。

「じゃあリール、おやすみ」

「あ、フィー兄ちゃん、待つて……」

部屋から出ようとした俺に、リールが声をかけてきた。

「ん、なんだ?」

「……あのねフィー兄ちゃん、今日……一緒に寝て……

「えつ?」

こきなり言われてびっくりした。同時に、飛び跳ねたいほど嬉しさを覚えた。

で、でもなあ、嬉しいんだけど、ホントにもの凄く嬉しいんだけど……い、一緒にちょっとなあ……さすがに恥ずかしいよなあ。

「フイー兄ちゃん……ダメ？」

上目遣いはダメーッ！ 断れなくなつかけやつよお……つて絶

対ダメだぞ俺！ 耐えろ！ 耐え抜くんだーっ！

「あ、あのさリール。俺つてば汗搔いたから、これからちょっとシャワー浴びてくるんだけど、だからそのあれだ……どうせ、俺が来る前に寝てるだろ？」

リールの顔を見ると、いつでも寝れそうな顔をしていた。まぶたを必死に開けて抵抗している感じだ。

「ま、待ってるもん……」

はつきりいつてもう寝そつだ。……せつと、俺が目の前に現れて安心したんだろうな。

「リール、無理しちゃダメだぞ？ 寝れる時に寝ないと美人になれないぞ？」

「いいもん。美人になれなくとも……フイー兄ちゃんのこと、ずっと待ってる、もん……」

だとさ。しぶといですこと。まあ、リールの場合、いま寝なくたつて美人ルートは確定なんだけどな。

しかし、これはどうしたもんか。ちょっとまつ……

あつ！ ひらめいたつ！

「リール！ 俺はここに自分のベッドを持つてくれる のは無理だから、まあ……床で寝るから、それならどうだ？ リールが明日の朝目覚めた時に俺がここにいればいいだり？ それとも、やつぱ一緒にやなきやダメか？」

「……じゃ……それで、いい……」

お眠りになられました。

さてと、じゃあまずはシャワーを浴びてきますか。んで、そのあ

とに俺はかけ布団だけ持つてリールの部屋へ。

と、このあと俺は、その通りに動いたのち眠りについた。

なんか、最近では一番にぎやかな日だったかもしれないな、今日。

「ぐぬう……！」

わたくしめことハイニッシュの朝は、奇声を上げることから始まる。

奇声の理由は腹部の圧迫。

目を開けるまでもない。みなさんだつてお分かりでしょう？  
だつてわたくしめは昨日、いや、寝たのは一時過ぎでしたから今日  
ですね。というわけで今日、わたくしめは自分の妹の部屋で寝た  
のですよ。 といふことは間違いようがないでしょ？  
わたくしめのお腹の上にいる可愛らしい人物の名前。  
それをみんなで一緒に呼びましょう。せ～のつ！

「リールう……」

寝起きだからでしょ？ 心の中のよつたテンションで声を張り  
上げることはできませんでした。  
わたくしめは確かめるまでもない答えを確かめるために目を開け  
よつと思想います。

さてさて、今日はどんな白いパンツを穿いているので……え

？ えつ？ ええ！

わたくしめの なんだこの口調！ もうこい疲れた！

俺の腹部にいる人物はリールじゃなかつた……

「……スリイナ、お前何してんの？」

えへへ、と笑う制服姿のスリイナ。

「えへへ、じゃねえよ。一回ビコでくれ。といつよつ、なんでお前  
なんだ？」

「リールちゃんが一回やつてみればつて言つから、つこ……」

「つこじゅねえよ、つたく……。ビコつでこつもよつ重いなあつて

思つたんだよ」

そう言つと、スリイナは傷ついたような顔になり、俺からさつさと離れていつた。

「お、重かつた……？」

スリイナが泣きそうな顔で問いかけてくる。

ああ……めんどい。なんで自業自得の奴を俺が慰めなければならんのだ。……でも確かに、重いつていうのはちょっとストレート過ぎて酷かつたか？……しゃーねえな、それなりの撤回しますよ、すればいいんでしょう。

「いや、重いつていうのはな、あくまでリールと比べての話だ。お前とリールじや背丈が違うんだからお前の方が重くて当たり前だろ？ それにあれだ、俺にしてみたらお前なんかまだまだ軽い方だつたよ」

はっ！ どうだこのフォロー、完璧だぜ！

それを証拠に、スリイナは顔を素晴らしいにこやかに、それはもう美人の極みといつても差し支えないほどの笑顔を浮かべていた。がしかし

「ほんと？ 軽い？ それってどのくらい？ キャビア何缶分？」  
褒められたせいで調子に乗つたらしく、半ば暴走気味に質問してくるスリイナ。キャビア何缶分なんぞ知るか！

俺はうざいと思ったが、無視するとヒートアップすること請け合ひなので、超面倒だと思いながらもそれらの質問に答えてやることにした。ただし、一気にな。

俺は立ち上がり、スリイナに近寄つていいく。

スリイナは俺のそんな行動を怒つたと判断したらしく、急に「ごめんねごめんね」と謝り始めてきた。

けど俺はそれを無視！ お前が一度とそんな馬鹿げた質問をしてこないようにするために、俺は心を鬼にするぜ！

俺は一步一步、スリイナへ近づいていく。

スリイナが自分から壁際まで下がつていつたので、簡単に追い詰

めることができた。

俺はスリイナの体に手を伸ばす。

スリイナが顔を真っ赤にしているが俺は気にしない。

俺は左手でスリイナの太ももの裏を持つ。 あ、柔らかい。 右手は背中に回す。 あ、これはブラのヒモですかな？ そしてそのまま持ち上げる。あれだ、いわゆるゆお姫様抱っこって奴だ。

「いいか？ これがお前が軽いっていう証拠だ！ 分かつたら、もう一度と軽いかどうかなんてこと、俺に聞くなよ？」

「う、うん……」

うむうむ、分かつたのなら降ろそう。

「それよりさ、朝食はできるんだろうな？ できるからこそ、俺の上に乗つかつてたんだろうな？」

もしうけでないのにこんな遊びをしてたつていうのなら、俺はそのスカートをめくつてやる。

「できるよ。じゃあ下いこつか

スリイナはそう言つて、機嫌よさげに部屋から出て行つた。

……まったく、空氣を読めない子は嫌われるぞスリイナ。そこは『あ、ごめん。まだできないの……』だろ。そしたら俺が『んだと！ 覚悟はできてんだろうな！ それい！』と手を振り上げて、最後にスリイナが『きやつ！』だろうがよ……。

ま、別にいいんだけどな。スリイナの下着の色は大方予想がつく。ズバリ白だ。

なぜかって？ あんな純朴お嬢様が黒とかなわけないだろ？ それにさ、昨日スリイナの谷間を拝見した時、下着の色は白だつたんだ。だから白だーつ！

つて、俺は朝からなんちゅうことを考えてるんだ！ んー、これはもしかすると、マイケル症候群を発症したのかもしないな……。末期になると自らの服を引き裂いて全裸で街を闊歩し始めるといつ恐ろしい病気だ。……『めんなさい、こんな病気ありません』。

なんて冗談はさておく。

リビングに向かうと、スリイナの言ひとおり、きちんと朝食が用意されていた。しかも驚くなれ、今日の朝食はなんと

フレンチトーストだった。

拍子抜けだ。

昨日よりもだいぶあつさりとした朝食は優雅に終了。色々準備したのち、父さんと母さんの遺影にいつてきますの挨拶をして、俺たちは学校に出発した。そして学校に到着すると、俺とリールは引き離される。運命とは残酷なものだ。

迎えた放課後である。

たいぶ時間飛んだなあとか、できれば思わないで欲しい。一年は三六五日もあるのだ。その中に何もない平穏な日がどれだけあると思つてるんだ？ 恐らく九割はそんな日だぞ。

で、今日はそういう日だつたんだ。お伝えすることなど何もない、平々凡々な日だつたんだよ。もつと言えば、今日は『ストルス雑務店』も定休日。ホントに何もない、のんびりとした日なのだ。

あつさりと残酷な運命から解き放たれた俺は、スリイナと一緒に校門の前でリールを待つていた。

「フイー、あのさあ……」

そんな中、スリイナが口を開いた。

「何だ？」

「明日は土曜日でしょ？」

「そうだな」

「だからね……その、今日、うちに来ない？」

「いいぞ。何もないしな」

「ほんとっ？」

「ああ、今日はホントに何もない日だからな。それにこここんどこう忙しくてお前の家に全然行けてなかつたし。久々にお前の家が見たいつてもんだ」

心からそう思う。なんども言つているが、スリイナはお嬢様である。家だつてバカみたいにでかいんだ。確實に俺の家の一〇倍はあるだろうな。ちなみに、俺の家は可もなく不可もない普通の大きさの家だ。でもその一〇倍つて普通に凄いだろ？ んでもつて、そんな家に行きたくないわけがないだろ？

だから俺はあつさりオーケーしたんだ。きつとリールも行きたいと思うだらうしな。

「じゃあ私、迎えを呼ぶね」

スリイナは携帯を取り出して電話をかけ始めた。

これで歩かずに済む。別に家までそんなに離れてないけど、一〇分近く歩きたいか歩きたくないかでいつたら、そりや歩きたくないよな？

なんて考えていると、初等部の子供たちが校舎から出てきた。実にいいタイミングだな。さてさて、リールはどこだ？

あ、いたーつ！

俺は恥ずかしげもなく手を振る。

リールも気づいて手を振り返してくれ……ん？ あれ？ 手を振り返してくる人数が明らかに多いんだけど？ 一、二、三、四……九人多い。九人……？

ああ、きっとあいつらだ。全員リールと比べて特徴が乏しいから分かりにくかったが 野球ボーイズもだ。

「よ。ここで一緒になるのは珍しいな」

近づいてきたガキどもに、俺は声をかけた。

「今日もボール入つたら取つてくださいよ？」

「はーい残念でしたあ！ 今日は何でも屋がお休みの日でーすつ！」

俺はしたり顔で事実を告げた。……大人気ないな、俺。

「え？ そうなの？」

「そうなんだよ。お前らが利用し始めたのは三週間ぐらい前からだつけか？ ま、知らなくて無理ないかもな。今日は一ヶ月に一度の定休日だ」

休み少なつ！ って思つたろ？ でも、学校に行きながら、俺たち兄妹が生活をやつていけるぐら『ストルス雑務店』は稼いでるし、スリイナを含めた近所の人たちに思わせるためには、このくらい働かないダメなんだよ。

なんでそんなことを思わせる必要があるのかつて言えば、前も言ったよな？ 殺し屋をやつてるつてことを隠すためだ。

大変つて言えば大変だけど、つらいってわけでもないし、哀れみ

はやめてくれよ？

「あーあ、今日は野球できないな……」「玉拾いがないと野球できないって、お前らどんだけボールなくす気なんだよっ！」

ガキどもは俺のそんな突つ込みを華麗にスルー。哀愁を漂わせながらトボトボと立ち去つていった。……そんなに野球したいなら部活入れよ。そうすればボールとか盆栽とか気にする必要もなくなつて存分にプレーできるだろうによ。つて、そういうふうだ、お前らなんで草野球で満足してんだよ！

声を大にして尋ねてみたかったが、そこまではいつに興味があるわけでもない。だから心中のみでの疑問とさせてもらつた。あしからずご了承してくれ。

まあ、そんなことより、「リール、スリイナの家に行くか？ スリイナが誘つてくれたんだけど？」

「」のことをリールに教えていなかつたじやないか。ま、返事は聞くまでもないけどな。

「うん！ 行く行く！」

な？ 行きたいに決まつてるんだよ。逆に行きたくない奴なんているのかね？

と考えていたその時

黒塗りの高級車 リムジンつて奴が校門前に止まつた。フォシルニクス家のお迎えが来たようだ。

運転席のドアが開き、紳士という言葉が似合つおじいさん執事登場。執事さんは俺たちの方まで回つてきて、わざわざドアを開けてくれた。凄いだろ？

「さ、スリイナお嬢様、お友達もどうぞ」「フリーとリールちゃんからお先にどうぞ」

「いいのか？」

「いいからいいから！」

楽しもう！」とスリイナに背中を押されて、俺とリールはリムジンの中へ。

一  
座  
い  
つ  
！」

はしゃぐリール。別に俺もリールも乗ったのはこれが初めてじゃない。数回乗ったことがある。でも、それでもはしゃぐってこれは。だつて、俺もはしゃぎそうだもん。

もうそこいら辺の車と全然違う。リールの轟<sup>轟</sup>とおり広い。これに尽<sup>つく</sup>きる。普通に寝れるもんな。暮らそうと思えば余裕で暮らせると思つ。

そして、そんなミーキヤンピングカーがついに発進した。目的地はフォシルニクス邸。車だつたら一、三分で着くだろうつ。だから別にやる」とはない。のんびりと、このつかの間の贅沢を味わうことにする。

むむ！ 残念ながら俺にはやることができた。IJの座席の感覚はまたいつかしつかりと味わえればそれでいい。いまはやらなければならないことがあるつ！

パンツを見ることだ。  
それが何かと言えば、ズバリ！

俺の対面に座っているスリイナ。それを見て、朝の答え合わせをしなければならないという使命感に襲われた。みなの者、期待に応えようぞ！

ちなみにいま、スリイナの足はしつかりと閉じられている。無意識下での自動防御といつたところだろうか。さすがはお嬢様だ。だが　だがあしかしい！　こいつはお嬢様である前にちょっと

「元気のかた 免免の部分でいかい  
しれりを天然で 好か  
なので、 こう言えれば恐らく……

「スリイナ！ 足を開けつ！」

ほめーい！ やつぱつ想通りだ。早口の命令口調で言はば開く  
と思つたぜ！

ちなみに色の方も予想通りでした。え？ 何かつて？ だから白

だよ白っ！

「つ、酷いよフイー……」

スリイナは足を内股にしてスカートを押さえつけるよつて手を置いていた。

こうされてしまつては打つ手なし。完全防衛状態だ。ま、もう意味ないけどな。

「何が酷いんだよ。あんな命令で足開くスリイナだつてある意味酷いだろ」

まあ、それを狙つたわけなんだけどな。

「だつてえ……あんなの卑怯だよお……」

……な、なんか、スリイナが可愛いぞ。なんだこの気持ちは……。ゾクゾクというか、胸の奥深くで何かが高ぶつている。ハツ！まさかSへの覚醒か！この状況を楽しく感じるのは、そういうことなのかあ！……で、でも俺は！俺は自称ニコートラルなんでそこそこよろしくうーつ！

「じゃあお前も俺にやり返せばいいだろ？確かにいまのは俺も悪かつたかもしれないからな」

「ほらな？俺つてニコートラルだから、今度はマゾになつただろ？やり返す？それつてどういつ形でもいいの……？」

「いや、そりや限度つてもんをちゃんと設けてくれよ？あと、痛いのはヤダぞ？」

あら、これはマゾあるまじき発言だな。でもいいんだ。だつて俺はニコートラル。

「そんなことしないよ。でもそれ以外ならなんでもいい？」

「まあな……とりあえず体に害がなきやなんだつていいよ。ほら、今日は休みだけど、明日からは仕事を再開するんだからな

怪我して働けなくなるとホントに困るからな。

「そうだよね……じゃあ、害はないけど、でも強烈な仕返しを考えておくからね」

「へいへい、せこぜい楽しみにしておきますよ

吐き捨てるようになに言つたのち、俺はリールを見た。

リールは縦長の座席に横たわつてゴロゴロとしていた。なんて愛らしいんだ！ そして白のパンツが見えているじゃないか！ なんたる幸運だ！ ありがたやあありがたやあ！

「フィー……」

横から死んだ魚を見るような視線が突き刺さつてきた。

「な、何ドン引きしてんだよ！ いいだる別に！ スリイナだつて目の前にパンツがあつたら見るだろ？ そうだ、俺の見せてやるよ。さつきのお返しだ」

「み、見せなくていいよお！ フィーのバカツ！」

怒つているからなのか、それとも恥ずかしいからなのか、とにかくスリイナは顔を真っ赤にしていた。

これ以上からかうのはちょっと危険と判断し、俺はお口にチャックを施した。

さあ、どうでしたでしょうか！ リムジンという限られた空間をどれだけ愉快なステージへ変えられるかにチャレンジした今回！ スカートの中身当て！

座席のふかふかを存分に堪能！

リムジンの楽しみ方は 人それぞれさつ！

とまあ、急にまとめに入つた理由は、リムジンがフォシル二クス邸に着いたからである。

リムジンがフォシル－クス邸に到着した。

やつぱり車はいいな。早いし便利だ。父さんが死んでからは車に乗れなくなつたからさ、痛いほど分かるよ。この時代は車がないとダメだつてことがな。

とか思つてゐると、執事さんがドアを開けてくれた。スリイナが最初に降りて、俺、リールの順だ。

降りればそこは、まるでホテルの入り口。しかも、スリイナが帰つてきたからだらうか、出迎えが結構いる。まさにVIPがホテルにやつてきた時のようなだ。

中に入ればエントランスホール。てか、受付がないだけでホテルだね、ここ。

ホント久々に來たので、俺は首を右往左往させてお屋敷の中を見回す。鹿の首のはぐ製とか、それっぽいモノがたくさん飾られている。

「やっぱ凄いなスリイナの家は……つてあれ？」

スリイナに声をかけようとして、スリイナがいなくなつてゐることに気づく。

「スリイナ姉ちゃんはお着替えだつて」

どうやら、俺が色々なモノに目を奪われてゐるうちに、現実では状況が変化していちらしい。

「じゃあ、俺たちはどうすれば……」

精神と時の部屋から出た時に近い感覚に襲われた俺は、別の意味で右往左往。

「ひちらへどうわ」

そんな俺に助け舟の如く、メイドさんが素晴らしい笑顔とともに声をかけてくれた。

この家のメイドさんの格好は、紺と白を基調とした、いわゆるク

ラシックスタイル。しかしながら、それを着ているメイドさんが中々に可愛いお人だ。……俺のメイドさんになつてはくれないだろうか？

妄想にふける俺と兄のそんな妄想を知る由もないリールは、清楚で可憐なメイドさんのあとに続いて奥へと進んでいく。

そうして案内された場所は、前にも通されたことがある客間だった。客間なのにうちのリビングよりもはるかに広いという、庶民にとつては存在するだけで嫌味を覚えさせられる空間だ。

俺とリールは、その空間の中央付近に鎮座する高級そうなソファに腰かけるよう促される。お言葉に甘えてリールと一緒に座ると、計つたようなタイミングで紅茶が出てきた。

味はなんだらうかと考えながら、俺は一口飲む。

「な……っ！」

俺は雷に打たれた避雷針の気分になつた。

……れ、レモンティーだと！ なぜ俺の好みを知つている？ だ、だとすれば、リールのはミルクティーか！

俺はリールの持つティーカップを覗き込む。

レモンティー やん。……くそつ、サイコメトラーがいるんじやないかという妙な深読みしてしまつた俺がちょっと恥ずかしいじやないか……。

一人で頬を染めながら、俺は新たなる疑問を抱き始める。

……そりいえば、これはインスタントなのか？ いや、この家にはインスタントなんてものの自体が存在しないだろ。いや、もしかしたらその思い込みを利用して、実はインスタントを……いや、逆にそこまでの深読みをさらに読んで、あえて高級なものをしているのではないか？ けどその逆も……。

と思考が力オスしかけたところに、

「フイー、どうしたの？」

スリイナの声が届いた。 ちょうどいい。インスタントなのか

そうでないのか、この際スリイナに聞いてしまえ。

「あのセリの…………」

連ねていくはずだった俺の言葉は、序盤も序盤で止まってしまった。なんでかつて？ 端的に言つと……思わず目を奪われたんだ。制服じゃないスリイナを見たのがかなり久々ということもあったからか……いや、例え毎日私服姿を見ていたとしても、これには目を奪われたことだろう。

スリイナの格好は白の長袖Tシャツに黒のベスト、下は「デニムのホットパンツ」。ニーソンとかは穿いてなくて、生足が全開である。俺がじーっと見ていたせいが、スリイナの顔が赤くなる。

「へ、変かな？」

もじもじとした態度でそう聞かれたので、俺は考えてみる。

変かどうか……。別に変ではない。でもスリイナっぽくないと言えばスリイナっぽくない。スリイナは大人しいから、こういう服のイメージがまるでなかった。だつて最後に見たスリイナの私服つて、白のワンピースだぞ？ それは遠い記憶でもない。ほんの一、二週間前のことだ。

イメージとかけ離れた姿を見せられてどう答えればいいか迷った俺は、思わず最初に見た時の印象を口走ってしまった。

「エロい」

そう言つた瞬間、俺のつま先に激痛が走る。リールによるゼロ距離かかと落としを食らつたからだ。俺はあまりの痛さに悶える。……ごめん、リール。でもこればかりはそう思つちやうつて。

悶えながらも、俺はしつかりとスリイナを捉え続ける。

エロい発言のせいか、スリイナの顔は赤に支配されていた。けど着替え直しに行くでもなく、隠すでもなく、ただその場に立つてゐる。顔をよく見れば、恥ずかしさの中に嬉しさが混じつてゐる様に見えなくもない。

……やはりスリイナは痴女なのだろうか？ その恥ましい太ももを俺に見せつけ、自分は密かに高揚感を抱いてゐるところことなのだろうか？

そこまで考えて、俺は頭を振る。

ないない、ありえない。長年見てきたけど、スリイナはそんな奴じゃない。嬉しさが混じってるみたいに見えたのは俺の見間違いだろうな。

それよりもまず、エロい発言を撤回しないと。何しろワールが大層ご立腹みたいだし。

あとはまあ、スリイナの服装に対するちゃんとした感想も入れてやらないとな。せっかくオシャレしたみたいだし。

「ごめんな。エロいは違うよな。エロいじゃなくて、意外だったよ。俺はもっと地味めの服で来るのかと思ってたからさ……でもそれが、その、いきなり大胆なので来たもんだから正直びっくりして……けど別に変ではないし、俺はその格好のお前……好きだけど」

「……好き？」

言葉のチョイスを誤つてしまつた！ 最後は『いいと思つけど』でシメるべきだつた！ は、早く好き発言を取り消さないと！ 『す、好きつていうのはさ、その格好が似合つてるつて意味だ！ へ、変な勘違いすんなよなつ！』

あれ？ こんな感じの台詞つて、普通、女の方が使うんじゃないのか？ ……ま、いいか。

「……フィーツたら、照れちゃつて可愛い……」

「う、うつせえ！ 照れてなんてねえよ！ スリイナこそ、自分の照れを棚に上げて何言つてやがる！ 照れたお前だつて可愛いぞ！」

「えつ」

ぎやああああああああああああああああああああああああ！ 俺いまもの凄い変なこと言つたよなあ！ 勢いに任せ過ぎて、もの凄い変なこと言つちまつたよなあーつ！

……ああ、隠れる場所があるのなら、例え肥溜めの中でも構わないぜ……。心底そんな気分だ……。

その後、場は雑談タイムとなつたのだが、俺とスリイナは初めて

のお見合いみたいな雰囲気になってしまって、ほとんど会話ができなかつた。

リールがいなかつたら氣まずさで死んでいたかもしない。

もしかして……あの氣まずい空間こそが、スリイナの言ってた仕返しだつたのか？

いや、まあ、そう考へるにはあまりにもできすぎだとは思つけど……。

でも仮に……もしかつたのならば、確かにこれ以上ない強烈な仕返しだつたぜ。

あ、そういういえばレモンティーの正体聞いてない！

フォシルニクス邸からの帰り道、俺はそのことを思い出した  
なんてな、嘘だ。

……回りくどいことじげんめんなさい。ちなみにレモンティーは  
絞つたりして作ったそうです。インスタントじゃなかつたです。  
「おっほん。では気を取り直して。

俺たち兄妹はまだスリイナの家だ。まだっていうか、今日は家に  
帰らない。

泊まつてけだそうだ。

さつきまでの妙な雰囲気はなくなつたし、明日の仕事は午後から  
だからということもあって、俺は了承した。リールもその方がよさ  
そうだったからな。

それでいまは夕食中なんだが、やっぱ凄いね。何がつて料理に決  
まってんだけど、もうあれだね、レストラン、最高級のレストラン。  
夕食がコースで出てくるつて凄くない？

まあ……だからつて、雰囲気まで最高級レストランつてわけじや  
ないんだけどな。

「あはははははっ！ フィーニット君！ 婦に入りなさい、婿に！」  
こう言つたのは、縦長テーブルの先端 お誕生日席つて言つ  
かな？ そこに座つているスリイナの親父さんだ。

親父といつてもまだ若い。四〇手前ぐらいだつた気がする。交友  
のあつた父さんの話によれば、一代でこの家を築き上げた凄い人ら  
しい。でも性格がちょっとおかしい。

ホント、親父さんは人々に会つても変わらないな……。ま、気に  
しない気にしない。

「も、もう、お父さんつたら……」

と、いまの親父さんの発言を受けて頬を染める、俺の右隣のスリ

イナ。なんかお前、最近頬染めっぱなしになつたと強く否定しろよ。

「でもスリイナはフイーネット君のことが好きなんだろ？ んー？」

「ほら言ってみなさい、ほらー。」

なんだこいつ、最低だな。スリイナは俺のことなんて好きじゃないに決まつてんだろ。

「…………」

「スリイナ！ なんか言え！ 勝手に肯定されんぞー。」

「そうかそうか！ やつぱりなー！」

「ほら見たことか！ ここには俺がビシッと言つてやらないとー。」

「親父さん、俺は婿になんか入りませんからねー。」

「ん？ そうか……じゃあしおづがないな……」

「なんだ、意外とあつさり……」

「うん、しようがない。スリイナ、お嫁に行きなさい」「んでだよつ！ なぜそつなるつ！」

「親父さん、俺は婿には行かないし、お嫁も要りません！ 大体なんでそんなに俺とスリイナをくつつけたがるんですか！」「親として当然だろ？」

「当然じゃないだろ！ そこは普通、手放したくない！ だろ！ 俺だつてリールをお嫁になんてやりたくないし。」

「…………やっぱおかしいや、この人。新しいタイプの親バカとでもいうのか……。」

で、スリイナはスリイナでまだ赤くなつてうつむいてるし。……いや、もしかしたら落ち込んでるのかもしれないな。俺と結婚とか言わてるんだし。幼なじみと結婚なんて冗談じゃないもんな。

「スリイナ、気にすんな。俺と結婚なんかしなくていいんだから」

「冗談でも言つよつに明るく、けど親父さんに聞かれると面倒そつだから小さく声をかけた。

スリイナが慌ててなんか言おつとしてたけど、別にどうでもいい。たぶん、いや絶対に俺を気遣う言葉が、例えば『私は嫌じゃないよ』

とかいつ言葉が飛んでくるはずだからな。もつ聞かなくたつて分かる。

「ん？ フィーニット君、スリイナなんて声をかけたんだい？ もしや、『あんな親父から言われなくても俺たち結婚するもんな』つ』つて 」

「違う！」

「じゃあなんだろうな？ そのあのスリイナの慌てふりからすると……『子供は一〇人がいいな～つ』とか 」

「ちげえよ！」

「一〇人は大変だ。スリイナ、頑張りなさい！」

無視！ 無視ですか！ 片手で小さくガツツポーズ作んなつ！

「……はい」

はいじやねえええええ！ 親父さんが何言つてるか分かってんのか！ ああもう限界だ！ キレていいはず！ 俺はキレていいはずだ！

「いいに加減しろよ、アンタ 」

「こら！ 言葉遣いがだんだんひどくなつてきてるよ。もつと年上を敬いなさい。まったく、これだから最近の若者は……」

「す、すいません……」

出鼻をくじかれてしまつた。なんだよ急に……。てか、敬われたいのならもつとしつかりしてくれよ……。

「うんうん、分かればいいんだ。それより、一〇人はちょっと多いんじゃないかな？ 五人じゃダメかな？ まあ、孫がいっぽいっていうのは悪くはないんだけどね」

……もういい。もう無視無視。相手にしちゃダメだ。

俺は心を晴らすため、リールと会話することにした。首を左に向ける。

まあ可愛い！ でも心なしか不機嫌な気がする。……今まで相手をしていなかつたからかな？ それなら、いまからたゞふり相手をしてやるからな。

「リール、この」

「ふんっ！」

いつかみたいに効果音つきでそっぽを向かれた。ビ、ビビ、ビビ  
うしょう……。

「あははは、リールちゃんに嫌われたね。スリイナに浮氣するから  
だぞ？」

「この親父いいい！　いや、ダメダメだ！　これを相  
手にしちゃダメなんだ。また親父ペースになる。こまかにかく、  
リールの機嫌をどうにかしないと……。」

「リール。俺はどこにも行かないで、ずっとリールのそばにいるか  
らな。結婚だつてしないし、お前を一人になんかしないからな」  
そう言つと、リールはこすらに顔を向けてくれた。といつても、  
様子を窺つのような感じで、ちゃんと見てくれてるわけじゃないけど。  
でも、これはあと一押しで機嫌を取り戻してくれるはずだ。さて、  
どんな言葉をかけようか。俺がそう模索していると、

「そりかそりか、やっぱリールちゃんもフイーニット君のことが  
好きなのか。あはははは、モテモテだね？」　フイーニット　「  
「そ、そんなんじやないもん！」

リールが親父さんの台詞を遮る。そして、こすらにチラッとだけ  
向けていた顔を薄く染めたのち、さつきよりもひねりにひねつてそ  
っぽを向いた。一周回つて俺の方を向きそうなレベルの逸らし具合  
だ。

……ああ……せつかくこっち向かせたのに……お、親父の野郎が  
いらっしゃること言つから、リールの奴、恥ずかしがつちやつたじやんよ  
お……。

はあ……なんで俺ばっかりこんな氣まずい目に遭わなきやいけな  
いんだよ……。神様、ちょっとばかし理不尽だぞ……。

まあ、俺なんかにはこのくらいの罰を与えてこそ、イーブン  
つてことなんだろうけどな。

騒がしい食事を終えて、リールがどうにか機嫌を取り戻してくれたところで、俺たちは風呂に入ることにした。

もちろん混浴などではない。そもそも、この家には広い風呂が数ヶ所あるんだ。そんな狭苦しいことをする必要はない。……そりや、女の子と狭苦しいことするのは大歓迎だけど、それは倫理に反するつてもんだ。 つて、人殺しの俺が何言つてんだか。

まあいや。それで、俺はそのうちの一ヶ所の風呂に一人で来ている。

脱衣所がもの凄く広い。それはもうスパリゾートかつてぐらいにな。ロッカーもあるし。まあ、使用人さんたちが多いからなんだろうけどさ。

そんな広い空間で服を脱ぐ。フルになつたところで、俺は風呂場へ続く扉を開ける。

お！ そうそう！ ここの家の風呂はこいつのだつたつけな！ 眼前に広がる光景を見て、俺のテンションは上がりに上がる。大浴場と呼んでもいいほどの広さ。そこに低い塀みたいなモノが存在している。

その低い塀みたいなモノには、シャワーがついている。塀の左側に五個、右側にも五個、両側合わせて一〇個という配置。

それとまったく同じ塀がもう一列あるから、シャワーは合計一〇個。つまり、ここで一〇人が体を洗えるつてことだよな……。

啞然としながら奥に目を向けると、その一〇人が余裕で入れそうなほどにでかい湯船があった。

この浴場は確かに日本の銭湯というものをモチーフにしていると言っていた。日本すげえ。いや、これを作るほどの財力を持つあの親父が凄いのか？

ま、どうでもいいや。しかし、ここを貸しきり状態で使えるつ

て凄いことだよな。

俺は早速、体を洗う。　　お、このボディシャンプーいい匂い。やつぱこうこうのも高いのかな？　……って、男のこんなシーン見せられてもねえ？

快く割愛させていただきます。俺も分かってるさ！

というわけで、頭も体も洗い終えた俺は、広い湯船に浸かることに。

「うい～……」

こんな声も出ると。だつてホモサピエンスだもの。さてと……風呂から出たら何をしようか？

リールとしゃべつて、リールと戯れて、リールと寝るか。いや、寝るのはダメか。

なんて考えていた時だった。

ガララッ！　と脱衣所と風呂場を隔ててている引き戸が開く音。

……だ、誰か入ってきた？　……でも一体誰が？　もしや使用者さん？　いや、使用者さんには連絡とか入つてそうだよな。お嬢様たちがお風呂に入りますよつて感じにな。それに例えそんな連絡がなかつたとしてもだ、俺は脱衣所の入り口に使用中の札を置いておいたし……まあ、仮に札の存在に気づかずとも、脱衣所には俺の脱い服がある。誰かが入つてるつていうのは分かるはずだ……。

だからというかなんというか……使用者たちの可能性は限りなくゼロだと思う。だって、そんなおつちよこちよいな使用者さんなんて、この現実世界にはいないと思うし。そもそも使用者さんだとしたら、一人で入つてくるのはおかしいだろ。使用者さんの身分つていうのはさ、風呂に一人きりで入れるほど高いもんじやないだろうし。まとめてというか、複数人で入るもんだと思う。

でだ、それじゃあいま入つてきたのは一体誰なんだって話ね。

使用者さんを除くと、その数は限られてくる。さらにその中でも、人が風呂に入つているのにも気づかずに入つてくるアホと言えば……スリイナ？

あ、ありえる……。奴の天然ぶりならば、俺がどこの風呂に入つたかを把握していなき恐れがある。さらにあの天然ならば、札を置こうがそれに気づかない可能性が十分にある。さらにさらにあの天然ならば、俺の服を見たところで『ここで洗濯するのかな?』とか思わないかもしれない。ちなみにその服といつのは制服だが、ここには制服を洗うことができるクリーニングルームがあつたはずだ。つまり、あらゆる天然が重なり合ひ、奴は、スリイナはここにいるということになる。

といつても、まだ仮説だ。

ここからはその人物が見えない。入つてきた時は塀が邪魔で見えなかつたし、ソイツはそのあとすぐに体を洗い始めたからな。俺はまだ目視できていなわけなんだ。

なので、俺はソイツが誰なのかを確かめるべく、音もなく湯船から出る。俺はすぐさま身をかがめ、それからほふく前進の体勢になつて少しだけ進み、ソイツが体を洗つている列を覗き見た。

「ぶつ！」

思わず噴き出す。やつべ！ 俺は急いで顔を引っ込める。

ふう、どうやらバレなかつたようだ。 てかそれよりあの、ホントにスリイナだつたんだけど。……ヤバかつたよ。無防備だつたよ、うへへ じゃないじゃない！

俺はブンブンと頭を振つて煩惱を追い払う。

一刻も早くここを出よう。じゃないと俺の理性がなくなりそうだ。別にそれは、スリイナに興味がある、とかじゃないんだからな！ 目の前に、健全な男子の目の前にあんなものがあつたらダメなんだよつ！ もう見るからに柔肌でございましたーつ！ あくまで横からのアングルだつたので何も見ることができなかつたのが悔しいよおーつ！

つてああもう！ 思い出しちゃダメーーつ！

「」からはダビデ像でも考えながら行動することにする。

……ああ、冷静になれてきた。ダビデを考えることによつて、

萎えに萎えてきたぞ。

そうして、なんとか沈静化に成功したところで、脱出ミッションを開始する。

俺はいま、奥の湯船の前にほふく前進の状態で待機している。一方のスリイナは、俺に近い方の壜の内側で体を洗っている。つまり、スリイナのいる列の外側をほふくで移動すれば、入り口の近くまでは行くことが可能というわけだ。しかし、スリイナの座っている位置が入り口側のため、そこから先に進むのは行くことは不可能。强行突破なんてしようもんなら、全裸と全裸でこんなにちはすること請け合いで。

ということです、壜の外側を通り入り口付近まで移動しようと思つ。

……風呂場の床を這うつていつのは、あまり気持ちいいもんじやないな……。

なんてことを考えながらも、俺はなんとか移動完了。

しかし、問題はここからだ。

体を洗い終えたスリイナはどうする？ もちろん立ち上がる」とだろう。

それが大問題だ。なぜなら、立ち上がられてしまつと壜なんてあつてないようなモノへと変貌してしまつからだ。

くそつ！ ヤバイぞ、これはピンチだ……つていつのは「冗談だ。一応乗り切る方法はある。スリイナが湯船に向かつて歩き始めるまで、壜にぴつたりとくつついていればいいんだ。日本の言葉で言う、灯台テモクラシーって奴だ。身近なことには気づきにくいつて意味だよな。

と、スリイナの使用しているシャワーの音が止まつた。……よし、決行だ。

いま考えたとおり、俺は壜にぴつたりと張りつく。

「 つ！」

冷たつ！ 大理石つてことを忘れてたぜ……つ！

危うく声を発しそうになつたが、俺はグッとこられた。

冷たさが体になじんでいく中、ピチャピチャといつ足音が俺の耳に入る。どうやら灯台モクラシーは成功のようだ。

さて、ここからはもたもたしていられない。スリイナが湯船に向かつて歩いているいまこそが、脱出するための最大のチャンスだ。

俺は塀への張りつきを解除し、クラウチングスタートのような状態になる。

そして、そのまま四つんばいで歩いていく。なんで立ち上がるなりのかつて言えば、まあ……氣分だ！

入り口まであと五メートル。

よし、スリイナも気づいていない。いいぞいいぞ。

この時、俺はスリイナの綺麗な後ろ姿を見ていたが、ダビデ像と相殺しあつた結果、普通に見ることができた。うむ、いい尻だ。あと四メートル。

ここには、ついさっきまでスリイナが体を洗っていた辺りだ。シャンプーの残りに気をつけない うわーっ！

バチン！ と体を打ちつけた音が浴場中に響き渡つた。

俺は玉を強打してしまい、ただただ悶える。

そうしながら思つ。

夢、ここに漬える。

俺は入り口の方に向けている顔を、恐る恐るスリイナの方へと向けた。

玉を打ちつけた痛さによつて出てきた涙で、俺の視界はほとんど何も見えない。それでも、スリイナがあわあわしていることだけは分かつた。

そこで、俺の意識は急激に落ちていく。

これ、ヤバインじやないかな 玉が……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4206z/>

---

幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

2011年12月17日19時53分発行